り培養其外大驚草の如し。

仙翁

普通の花は紅白薄色絞り抔なり柘榴と通稱せるは丹紅の吹詰に咲て小輪なり葉尤小さし類草の秋咲あり此一品は花形異ざれども紅なり葉の形細く紅を帶たり八つ房と通稱せるは夏咲の石榴仙翁の形狀なれども花うつろひたる後同じ臺より五六輪出で再花開けり夏咲の中極紅の大輪あり羅生門と名づけ斷花吹詰に變出したるあり大輪にして紅の麗はしく古今の不双の奇品なり去年尾州より來りければ未だ見ぬもの多し此の種類篠に虫入りて枝に生々して花開けること重葵籌もて日除して養ふ時は虫の憂ひあらず秋仙翁の白山仙翁小倉仙翁などとて種類多し植替の旬は春時蒟芋して凡一寸餘にも生々したる時科を分け植替ければ少痛みて二三日が間日中しなるゝ程の頃合を善とす草生つまりて形狀美なり。

信濃國

及紫苑○菊○玉簪花○芍藥○萱草等島の溪間に植へし。

庭園に草木を植べき所の事

梔子○柏○楓○葛は山にあり○女郎花は野にあり○萬年青○梅○菅は島山にあり○沈丁花○丁子○梅○藤○百合は山頻なり○蓮○菖蒲は澤にあり○芙蓉○銀杏○伊吹○一八○黄梅○躑躅は山頻又島にあり以上擧たるを能意中に蓄へて庭造の則とすべしされど此外にも名草名木も數多あるべし。

杉苔植やうの事

庭中に杉苔を植るには下地の土を能くかきならし和げ置其上へ杉苔を伏て堅く踏付其上へ土をふるひかけて日影のときに折々水を灌げば能く蒸すものなりされども苔の不足なる所はなし難し其時は苔を細かに碎きふるひ土に交へ其土を能くならし打付て折々に水の養ひをする時は春夏は一月計に苔庭となるなり然れども日向の所は持とかたし又砂地は苔出がたし黑ほど土は尤よし。

松の植樣の事

凡松は庭樹の太夫職いかなる名園勝庭たりとも此一木なくてはことの足ぬ心地こそせらるれ然るを五葉でなくてはと筆に任せし妄誕友なし千鳥の徒然草なるべし近來松作りと唱ふる者あり枝は十字を嫌ひ幹は九字をさくるとかや抑木の生る時は上に雙枝を生ずれば下に兩根を生す双枝兩根十字にあらずや偖又風の吹回し日影の陰陽により

東園にも似寄て黄色の花夏時に開けり花後分したる芽取り分け植付置ければ速かに分し翌夏花篠多く出て開けり此外園名目の種類數品なれども雜花なればかい付け侍らず。

月下香

水仙の類にして根は玉なり春春に至り取出し分したる小さき玉を悉く取放し眞の霜雪の養ひ方輕重あれば枝ふり樹樣自然に長蛇の勢ひをなし遊龍の姿を顯すべきなり。

松樹の移植は十月より春二月までを良期節とするなり新堀樹は春正

玉のみ植付れば日ならず萠芽す夫より十五日經ては下糞を以て養ひければ繁生し秋に至て花篠長く生出白花の小輪逗〻咲升り盛り長じ薄暮より夜中馥郁たり花篠出たる抔は多く分して小玉と成翌年は花篠出ず春植易の時小さく分したる玉生々して翌年花開けり冬は洞室に措て養ふなり。

フラストハツトス　方言ツルハダ

實生のものなり春の彼岸後萠ければ殘らず萠芽し二三寸生々したる頃抜取植付るなり晩夏頃より葉の間毎に花出紅蒲の異形の花初冬まで咲續く其盛措時は枯失すれども洞室に圍ふ時は宿根して翌年は春より咲續けり實熟し綿となり糸にとりて織物に製す。

蕣子花　花形三英六英あり紫雪白絞り藤色紅鳶醉白抔あり鉢に植る時は花後一と篠宛にして其器の大小に應じ幾本なりとも植付るなり下水の揚土乾し置たるを煉て鉢或は瓶なりとも半より底へ植付ざれば翌夏根肥へて水差しがたし古人も美賞したる一品なれども咫尺して一花の形狀優劣を論じ親愛せるに足らず池水に列せる一品ならんか。

鎌山菖蒲　一名琉球菖蒲

淡葱の類なれども蒲の形狀にも似寄て葉強く三尺程に生立瑠璃色に艶ありて三英の小輪なり花後三四篠宛に分けて植付るなり水草の扱に養ふものあれども陸植にても異る事なし。

姫高尾　葉細く弱し漸やく四寸程に生々し初夏に至り花篠抔をかけ藤色六英の小輪開花す雪白あり二品なり鎌山菖蒲の扱に異ならずと雖も半白にして陰草を善とすこやしは嫌ふなり。

馬蘭　大小二品あり大草の一品は葉尺長く生々し薄藤色の三英科際より二寸程に生立小輪の花初夏に開けり小草の一品は葉矮く月末よし緑の立ぬる時は悪し晩秋の冷氣に向より春の陰にしていまた緑眞の出初るまでと心得へし植置て年々養ひなくともよしたゝ年毎に葉掃除するを松の養ひとす夫松は外の木と違ひ外の木は枝を切拂ふとも再ひ茂る根を以て育つなり松は根を以て育つといふとも葉の勢ひにて水を揚る木なれは葉の掃除第一とすへし水地は甚だ悪し山地の所をよしとす又平常に能風の流通する所を撰ひて移植せば繁茂す又水面に臨むときは其枝自然に育延て一入の深緑を帶るものなり松を植るに四箇の秘事とて此道の者唱ふは左の如し。

○立根あらは其根を伐採て植べし○若根の中に少しにても腐朽なしたる根あれば切捨て植べし○根株の鉢の破れぬやうに植べし○根をあまり地中へ深くならぬやうに植べし。

又一方松は濕氣を嫌ふ故に植んと思ふ下へ炭の粉木の葉を入又根へつゞ挽かけ其鋸目を悉く鰐にて卷て藥もてくゝりて元の如くに植べしされと中の太根にはさはるべからすかくの如くすれ順て生かへり青々と勢ひよくなる是奇妙の秘傳なりと又大木にて堀出し苦き木は川芎を煎じ度々灌げば生かへるものなりといふ。

櫻植やうの事

櫻は種類甚だ多し春彼岸ころより咲初て立夏の前後までも咲つゝきて一重八重ありて双の岡の法師はひとへ櫻をめでたしとて愛せしといふ櫻は枝をあまり切ことを嫌ふ者にてされば植ゆるにも大木は根附き難きものなり小木にても根を切ては附がたしと知べし若枝ぶりあしきときはきらずして細もて括て直すべし又櫻の種類を植んとする時は間々に松を植てよし常盤の色と花紅ひの取合せ能見計ひて造るべし是庭中の一壯觀なり。

紅葉植やうの事

紅葉は濕地を好む木にて百度に切ては附がたしされば小木より育つるに悪くはなし日當り悪ければ紅葉せず其心組にて地所を見斗ひて植べし大木にても春の植時を考へ植れば付ものなり植て三年目の比に枯ることあり其時を考て手入を致すべきなり古木になりし時は手を入養ひするに及ばずたゝ常に日當りよくば持前のいろを染いだすものなり。

諸木を太くする法の事

捻たる如くに生々す捻あやめとも方言す花異なれども色少し濃し葵葉の類ひなり培養鉢山菖蒲と同じ。

小蕉子花

草生姫髙尾にも似寄りて清明の頃に三月の節蒲芽三寸程に長生して科際へ花蕾矮く出蕉子花に似たる極小輪にして瑠理の花爪を折開く雪白あり二品なり不双の奇品なり花後葉長して七寸程に生立繁茂す根は大草の馬蘭の如し鉢底へ赤土の篩し溜の大なるを多く入れ塵芥土へ山砂多く交へ植付一重鼓簀下に養ひ其盤鉢に草餘るまでは植据措植直す時は取出したる盤倍せる器へかへるのみ糞抔用ゆる時は忽ち憔悴し養ひがたき草なり世俗翫ぶ草生にあらず諸國の産もあれども豫州松山の産のみ翫たり。

琉球半夏

小草にして夏より秋まで花開けり天南生の花形にて上を向き鳶色の天鵞絨の如き肌なり陽草なり冬は洞室に入措き八十八夜に至り取出しければ根膠しく分したるを取分植付るなり冬中干し水をすることなし。

芝蘭

紅紫雪白移白三品あり春の彼岸後より鼓芽萠を包みて生々す暮春に花開す野草なれば盆植にして眺とせる一品にあらず捨置繁茂すれども芽の頃時としては春暖ありて淡雪ある時は憔悴して開花せざる事あるが故に時季を勘考して霜除す捨置繁茂すと雖も植替ざれば葉に大小ありて形狀麗しからず半開の時堀揚肥たる葉の取捕一葉づゝに分植付れば打捕ひ形狀着なり尤去年の古根の玉少々計り附置なり諸々の種類に異り植替るを知らず植付の如く花開き翌年は三葉づゝに分る。

布袋草

葉の形蕗に似て向ひ葉に附中に萠を包み蒲芽し薄紫の異形の花一輪開けり陰草なり盆植にする時は葉毎に開花せるに肥かたし。

凡庭園の木はいふも更なり何木に限らず盛にいくつも切目をつけおく時は太くなること奇妙なり。

諸木に毛虫のつかざる法の事

鯛のかしらにあるびら〳〵を筆のさやに入て其木にいつくも釣さげ置べし毛虫決してつくことなし。

庭園に水を灌に心得あるべき事

夏月庭園の植物に水をそゝぐには午後日影になりて涼き時になすべし樹木の根本のみへそゝぐべからず地面總体へむらなく灌ぐべし夕景なれば葉に水のかゝりても宜しけれど朝と晝中とは葉に水のかゝるは木を傷むるものなれば其心得あるべし。

箱庭の事

今俗盆景といふは盆石とて盆に石を排べおき白砂を盛たるをいへるは非なり盆景こゝにいふ鉢植のことにてもとは草木を植たるなり其風情幽趣あらしむるを植盆、取景などいへり石なと立添たるは後世のことなるべし偖こゝに石を專らにして木にて作れる箱は花のみを植ても是を石臺と呼び今は箱庭といふなり。

凡都會の人家櫛比の市街に住居し少しの餘地なき所なとにて箱庭の

美人草、芭蕉の形狀にして草生小さし秋に至り紅花開けり咲たる篠は枯失す科元より分し生々せるは八十八夜頃取分け植措き度度糞養ひ措は秋に至り花出る冬は洞室に圍ふなり。

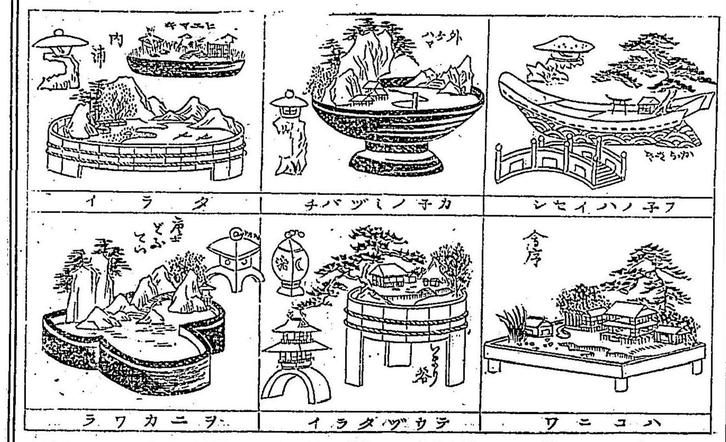
小蓼　小蓼

小蓼花とも通稱せり紫花黃花二品あれども同種の花替りにあらず形狀異なり豫州にて小かきつばたと呼草とは異なり下品なり二品とも小草なれども紫花は葉生異なり普通のあやめの小輪なり黃花の一品は葉生石菖に似よりたり花至て小さく二品とも暮春に開けり花後より葉尺長く生す植替は花後を善とす。

石帶花

甘草の類にして葉細し秋に至り鳶色に黃色を帶たる六莢の花上を向き開く且に咲て夕に凋めり科になりて生々すれども土中を遠ふことを遠く分したるを採て一纏ひにして植付措けば翌年科になりて花開き水を椽先に排列し目を喜ばしめ蔣を開くの一瓦甑たりしかのみならす白定方窯に云盆に五色の砂石を布き水を貯へ石菖を植るは眼の藥といへりされはこゝに數圖を出したれはこれに本づき又各自の工夫によりて誰にても出來易きものなればなり。

因に記す浪華の畫家、長田武禪は月岡丹下の弟子にて能畫なり清貧を安じ


内
外
ヤマヒニ
ヤマ
ヤマ
ヤマ

の小草あり何れも秋開花す捨置きて繁茂す。

蓮

大草中草小草の數品あれども似よりの花多きうへに處によりて名區々なり植替の旬は清明の三月なれども浮葉一枚出たる時を善とす瓶より取出し根に節掛けて取放し横になして瓶の底へ入れ下水の揚土乾し置たるを豆腐からを交へ堅く煉て植付一日乾し置き翌日水を措ずなり日向に措けば忽ち崩芽す蒼水中に見たる時運送する時は蒼其盤にして憔悴す莖落にあり し事十とせ餘りの間其のさまを見るに蓮花流行せる事斜らず數類を集め親愛せるものに問試るに其者語つて云く江府へ下りし時そのさまを見るに斷もの稀にして親愛せるものなければ種類探索せるものあらざれば名迄も區々なりと云へることを今思ひあたれり。

大荒落は雪白の大輪にて葩先より元まで紅のさし入れあり絞り生なれば肥瘦により異同あり小器に養ふ時は紅のさし入れ爪に而已あれども天竺斑とは懸隔せるを穿鑿せずして天竺斑と呼べり。

天竺斑大輪雪白にして葩先のみ紅の星あり肥たりとも狀態ことならず。

藤壺渤紅大輪なり

紅碧蠻大輪渤紅曙絞り

紅天上極紅大輪吹詰

二重青雪白大輪爪折葩二た重青色

渤葉渤色大輪

西湖雪白大輪の吹詰

大白は雪白にして大輪

尾州極紅中輪瓶に養ひて花篠多く出で花ひらけり。

種類多しと雖も優なる十品を現しぬ大草花美なりと雖も瓶に植る時は花篠少し小草の種類は花多く咲けれども形ちつたなし。

唐松草

野生の草は花はなきか如し白花の一品は花數多く開けども葩なく蘂而已なり一丈の詠の絶ず是又誠齋が詩を左に擧て證とす。

三徑初開是蒋。再開三徑有二溯明一。誠齋奄有二三三徑一。一徑花開一徑行。

草木は萬物に勝れ德あるといふ事

秦始皇が世に傳れる書を悉く燒捨て儒者は國家を亂す者とて穴に埋し時と雖も種樹の書は世に傳へよと勅下したりしとか又佛の法を說神の天降りたまひける時も樹をたよりとなし玉へり人屋尤このいとなみあるへきことなり史記貨殖傳にも植木の利をいふ又大和本草にも吾朝樹を植て民用に益ある者を數多あげたり。

土地善惡の事

草木は地の毛髮といへり人も血氣盛なるときは毛髮黑くして光澤あり血氣衰ふときは毛髮脫落し或は白くして光澤なし草木もかくの如く地氣肥たる所に生れは常にかほりて花咲實のる諸國の名產あるも其物其土地に相應して且地氣盛なる所に生る故食物は味よく藥種は効力他州に產すると違ひ氣味調ひ奇功ある類なり又草木は地にもとつく故、土地の品を考へ植ると肝要なり黑ぼくに好ものあり赤土に好ものあり眞土に好ものあり砂に好ものあり草木各好む所あり嘗は深山幽谷に生る草木は陽性にして清潔なり故に多くは陰地を好み

粪穢を忌む物多し深山の土は黑ぼくなり故に植る土も又黑ぼくに植べし又海濱に生る草木は陰性にして魚類の肥を好む眞土或は砂に植へし又原野に生る草木なれは野土に植へし此理を能會得して庭園の草木も植ゆへきなり。

樹木に東西南北の植樣ある事

齊民要術云凡一切の樹木を植るに其木の陰陽を覺て移植すること なかれといへり先植んとする時其木の方角を能正すへし木に表裏あり表を人の常に見方に向はしむへし又大枝を南方に向はせ手にて動かすへからず又根を多く切たる木は梢を悉く切棄べし決して惜むべからず梢多きは活かたきなり。

諸木を南方より北方に移し植れは多くは枯る物なり移して後臘月に根の傍の土を去て麥藁を厚く覆ひて火を付て藁を燒て本の如く土を厚く加ふべし移して後一二年も過すして實なるものなり若年々此法を用ゆれは南北異ならす榮ゆるなり之人身に灸點するかことし。

樹木を移植するに原立生ありし東西南北の方角取違へぬやう植れは大方はつくなり。

諸木を移植して後其葉やがて悉く落葉せは必す活ものなり若葉凋て落ざるものは枯るなり又若葉凋まず落ざるものは是又活たるまるし

から松と云ふは七八尺に長生し花篠は八方へ長く垂れ紫色の五英にして蘂黄色麗はしく草の形狀花とても上品なり實生多く長生して三とせ經て元草と同じ陽草なり糞を嫌ふなり。

石解

紅白黄花青花あり酔白又は闌咲とて形狀異なり夏時花開け二歳の篠に花開き夫より分する事なければ花後切取差芽すれば日ならずして芽吹出根を下したる時植付るなり揮て土なくして抄擲而已にて植付るなり霖雨の時雨を除ざれば新篠殘ず水腐す高き場にて一と重簀もて日除するなり世俗花を翫もの なり斑入葉替りの類親愛すれども予は癖にして花而已愛しける故葉替りの穿鑿することなし。

芭蕉の形狀なり眞より穂出秋中逓々に花篠出開け紅花黄花又は黄臺の紅花あり矮鶏と俗通せるは紅花にして草生少さし日強の場に糞ひ置糞を度々すれば五六尺なりと知べきなり。

四時の時候心得の事

草木に害を爲すは風より大ひなる者はなしされは風烈しく吹荒む時は鉢植其外庭木等に心をつけ植木大にして鉢小き物は早速棚より下へ下すべし又植替たる草木に心付若ゆるぎて竹の渡し挫なくは其邊の根の丈夫なる木へ竹を渡しまかと結付置べし大雨霖雨の節は建蘭の類松葉蘭百兩金等を内へ入べし雨愈久しく降つゞかは追々根の腐り易き類を取入べし又暑氣に向ふ節は鉢植に心付水を灌くべし日中にても土白く乾ば根へばかり澆べし日影になれは葉の上より澆きてよし又蔭を好む植物は暑中には蘆簀を二重に覆ふべし冬期になれは蘆筵にて南向に片廂を拵へ鉢植を入るなり日さしは土際まてふき下し北風を防くべし又盆栽にて寒に傷まぬ類は高き地を掘て鉢植を多く集め其傍埋みてよし雪催しの前には庭園の枝細くして折易き物は竹を添へ置へし霧島躑躅などは細にて卷置へし松の枝又竹なども雪にて折易きものなり節々振ひ落してよし。

草木下種の事

土は草木の母なりこれ動物の胎を養ふと同し母の氣血調和すれは其子自ら易し草木も又然り土地の陰陽を考へ草木の陰陽を察すること

に長生す小雪の頃の節掘出し根を採り軒下或は椽下抔乾きたる暖所に埋め置春の彼岸後取出し植付るなり實熟したる時採入貯置春蒔けば委く秋開花す。

紫雪白に吹詰一品あり藤色或は紫六英細紋三英の紅花紫紅咲分け紫白紋り抔にして敷品あり野草なれば捨置蕃茂すと雖も鎌山菖蒲の培養にする時は分することと多し。

鍬形草

紅花白花二品は小草なり小輪の花夏時に開け黄花の一品は中草なり鳶色の一品は大草なり二品とも秋開けり雜花なれば捨置き繁生す。

武者龍膽

瑠璃雪白二品あり葉小さく還ふて生々す羅生門の花形の小輪なり夏時に花開けり捨置きて繁生す。

九曜草　一云深草菊

葉科際而已にありて花篠長生し車輪の如第一なり譬へは萬年青葉蘭の實は日向を嫌ふて根の本にあり故に日陰に蒔五穀菜蔬は陽に屬する物多く殊に稻の穂は葉の上にありて陽氣を得て實のる故に陽地に植るなり又木も此類多し。

種をとり貯るに次第あり春實のる物あり秋實のる物あり何もよく實入たる時先一つを取て肉を割て中の核を見るべし肉は皮に滿仁は殼に充て硬けれはこれか實のりたるなり先一本の草なれは一子を採て試み一歩の草なれは一穂をとりて試べしたしなき草なと初より殘さず摘採て其種いまた熟せさる時は種を失ふ事あり心得べし實入よけれは採て一兩日乾て濕をとり紙袋に入て鼠のつかぬ所へ置或ひは箱に入貯ふべし又子をとりて直に蒔ものあり是をとりまきといふ。

凡草木を盆へ蒔ならは盆の底へ土の塊を入其上に畑土を中節にてふるうて一寸二三分も入其上に蒔なり但し南天の實は十月霜のあまりかゝらぬ内にとり皮をむき盆にまき其上に藁を短く切て舗べし又は茶殼をかけ置もよし急に生ぬものなれば土をかたまらせぬ爲なり翌年の十月には僉よく生るものなり「硃砂根は正月中雨水の節なり より彼岸まてに實をとり皮をむき洗ひて水を乾かし摺鉢か箱の中へ蒔なり上に薄く藁をあみて掛極日あたり能所に置根を生し芽の出んと思ふころ藁をとり除て中日向に置暑中には鼓簀の下におくべし「百兩金

く萠出で黄色の吹詰にして蘭に似たる小輪の花咲けり秋に至り分したる芽を採付るなり糞を嫌ふなり。

射干

野生の花は浦なり極紅黄花黄の移り白ありて四尺程に長生して晩夏より花開く俗に矮鷄と通稱せるは小草なり浦黄色の二品あり何れも六英なり四方葉と通稱せるは五寸程に生々し四方に葉付て花は浦の十二英十英八英など交りて開花す植替の旬は春萠芽して葉の開きたる時をよしとす。

松虫草

大小の二草あり葉は科際にありて花篠出虫の形狀の黑花開く抄擢屑山砂すこし交へ植付るなり極陰草なり長く生々しがたき草なり

鈴虫草

松虫草の一種にして葩細く薄浦色の花なり培養前條に同じ。

水蘭

は蘭の蓋を板にてする共いへり或は如露にて五日目位にすこし水をかくべしともいへど先はかけぬ方よろし「萬年青も皮をむくべし」「蓮は實の頭とまりをすりて肉の少し見ゆる程にして茶碗の中に清き水を入て積おけば七八日にして一葉開くなり廿四五日めに池へ移植すへし「牡丹の實もすりて蒔べしまかせされば殼かたくして生ず彼土の人は殼のあたまをすりて蒔ことを知らずたゝ舊根を分て殖す故に牡丹と名を付しとかやされとも實は生るはづの者なれと手がへしで却て生ぬやうにすることあり桃や梅の實生を見ても合點すべきなり。

草木ともにすべて實をとりて直に蒔ものは仔細なし春とりて秋蒔ものあり夏とりて秋まくものあり夫を善へ置に採し時すぐに砂か土におき秋の彼岸に蒔なり。

草木の實を入より貫ひ或は種物屋にて購ひたる時水に入て見るべし能實は水に沈みて下に居つく時逆になるなり是實の目利第一の秘事なり或人龍眼肉の實じやとて清舶の船主より貰ひ秘藏して蒔て見たれはどふも枇杷のやうなものが生たといつて掘捨た跡へ彼船主が來りて龍眼肉の枇杷葉だちじやと又だましたとかやよく味ふて油斷めさるなと金生樹譜に見えたり。

肥料并に培養の事

山野自然に生ずる草木は實熟して自ら墜落腐爛すれば則ち其物の肥となるなり冬木は葉繁りて暑寒を厭ひ夏木は秋葉落て土を覆ひ寒を凌ぐ是自然の理なり然るを實を採盡し或は葉を掃除などするは理に逆ふものなり故に手入培養の法を用ひざれば生長せざるなり秘傳花鏡に云人力亦以奪天功と誠に然り又云澆灌人之需飲食也不可太饑亦不可太飽といへり凡草木に用る肥料甘一品あり其中人糞馬糞などの穢物を嫌ふものあり神社の庭或は神前貴人の庭園の草木に糞穢の物を用ひ難き事ありかくの如き時は代用になすに干鰛灰汁油粕酒等を以て合せ腐してすれば大抵同樣に肥るなり。

土拵の事

凡土こしらへは植木屋かいふ草木ともに生た所の土て植そこの水をかけれは間違ひなしとかや是はそふやりそふなことなれと都の城を植るに日向から土と水を取よするはめつたに出る事てなしそんなことをいたすに欲てくだされといふたら先東京て番町四谷青山巢鴨あたりにあるすこし赤みのある黑土は何を植てもよく育ち草木の勢よくなるを見れは上品の植木土といふべし染井や王子大久保高井戸目

浦公英の葉生々し細く長く生々し暮秋に至り花篠長生し枝をかけ黄色にして蘭の如き花開けり秋葉流れて宿根し春時萠芽す沼草なれども陸植に糞ふて生々す日强を嫌ふ雜花なれば捨置繁生す。

茶芄

烏頭の類にして葉の形草生とても似寄たり薄黄色異形の花開けり捨置番すと雖も陰處を善とす。

夏水仙

普通の水仙の類なれども春彼岸後萠芽し葉幅廣く大草なり夏土用前葉流れて立秋すぎ花篠而已にて薄紅に少し瑠理を帶たる大輪の花開けり捨置きて多く分して繁茂す。

浦公英

袋たんぽゝ二品あり外山と通稱せるは極大輪にして葩の半より披けり白花爪紅あり青花あり野草にして捨置て繁生す世俗斑葉を稱して花を稱するものなしと云ふとも予は斑葉はきらふこと故園圃に措

く。

燕尾仙　琉球仙翁

地に養ふ時は三尺程に長生する大草なり青山長者が丸に住める名たゝる花嗜の翁のありて草木培養に手練ありて園に滿ちあく生熟せざるはなし此草の繊花形の異なるを撰び實生丹精ありければ雪白醉白の二品變出し殊に秀たる斑葉なれば古今未曾有の奇品なりとて秘藏の珍花なり培養は普通の仙翁に異ならず。

立葵

城州加茂の葵の葉に似たれども向葉にして中より莖一輪生じ小輪の六英三瓣雪白青色なり夏時に開き陰草なり秋葉流れたる時植替るなり。

狼牙

春彼岸頃より萠芽の時花蕾生立迫〻長生し多く枝を鉢植なれば八方へ下り小輪の吹詰の黄花夥しく咲て葉なきが如し花後根を分け植付れば繁生して蛇母に似たる黒邊の墨にて染たやうな黒土はどふでも水氣か深くして根のはりわしゝと敘ゆ但しこれも巣鴨や大久保へ道の三四十丁隔たる地からはそふ自由に土を取よすることもならぬ夫から遂に乙甲といふ虫かわいて植かへ時分に植かへすからして仕舞た人頗る多し若そふいふ人はどこの土でも冬の内三四度下肥をかけて切返し凍らせ置て用ゆべしこれを並土といふなり「又下水の土をあげ置て塵をふるひ石を拾ひ櫻草を植れは花いたつて光澤よし又此下水土の中にも下谷邊の土は別して萬年青によろしとなり築地もよけれど下谷ほどにはなし偖下谷へも築地へも遠き所なら川砂二升眞土三升山手の赤み土五升合すれは下谷の土と同し樣になるなり或いふ塵塚をとり除てそこへ流下の土をあげてかきならし芋を作りしに至極よく出來て芋の風味もよかりしかば冬になりて耕がへし肥をかけ翌年になり菜を蒔たるに殊の外蔓延て四五尺になりしと語るを植木好の人が聞つけてどふぞ其土を一升ばかり下されと平に無心せしとかや芥を捨たとき兼て心がけとり置手入をして用ゆべし土は細かなるがよしと素人は思へど大きな了節違ひなり目の大きさ三分ばかりの篩にて一ふるひふるひ壁土の如くねり十日ばかりねかし置少し水氣のあるころまた篩ひ見れば茶人の仕ふまき灰見るやうになるなりある人は畑の土塵塚土

葉七八寸程に繁茂す雜種なれば捨置生々すと雖も大科になりたるを其儘置時は鬱鬱して朽腐し枯失せり。

白糸草

猩々袴に似たる形狀にして冬流れず春時萠芽したりとも古葉其儘なれども色衰ひければ取り去る可し左なくば見るに惡しく花蕾は芽と一同に出で六七寸程に生々し花形も定かならざる小輪の雪白の花開けり植替春萠芽前を善とす雜花なれども分しがたし冬霜除下に措なり。

時鳥草

大小の種類多し四尺餘に生々せるは紺地にして白く斑あり一尺程に生立草あり白地にして紫の斑あるあり黄花の一品は八九寸程に生こし黄色に黑き星ある大輪なり矮鶏と通稱せるは極小草にして黄花なりいづれも暮秋に花開けり夏咲の一品は黄花なり春時彼岸後植易る其外種類多し日向に置時は花の頃葉全たからず陰處を善とす。

下水土合せ土とて四種の土ありといへり畑土とは前にいふ並土のことなり蘆塚土は蘆をとりし跡の土なり合せ土といふは蘆塚の下の土へ流れぬ下水の土を合せ蜀黍か芋を作り冬になりて淡き下肥をかけ度々切るべし凍らせおきたる土なりとなり深山土といふは落葉の年年に積りてのち朽くされたるが土となりしなり此土に植るものはさのみ多からず山沙は市川より眞間近邊よし紅葉見の亭に二三升ばかりかぬてたくわへ置べし鼠山邊にもあれどをとれり。

こやしは下糞を代にして野土赤土眞土蘆灰を合て作るを合肥といひわら灰をいれぬを肥土といひ下肥と水と小便を合せたるをくだし肥といふ但しこれは植木屋ですることゞとしたるに小庭の内や盆植ばかり持に下ごいせゝりもあまりむさし故にまつはごまめをよくいりて餌すりばちですりよくゆがき瓶にいれて廿日ほども置て用ゆべしもとがごまめなれば何ほど臭くてもさのみきたなからず魚洗汁を用ゆる人もあれど腥くてわるし。

庭園草木驅虫法の事

凡草木に生ずる虫類世多し其内殊に害を爲す虫を左に記すなり土中に古根芥などあれば虫を生ずるなり間を遠く隔て植風の能流通するやうにすれば虫少し木の類は古枝を切すかし風を入べし又肥へ烟

木芙蓉　薄紅雪白單の花二品白露頃の節旦に開花し夕に凋めり七面と通稱せるは紅花の吹詰にして八方より葉出づる同じ花形にして醉芙蓉と通稱するは開花の時雪白なれども翌日滿開して醉白に變ず此二品暮秋に開けり葉度々に養ざれば咲後れ淡霜來る開花しがたし落葉したる時科際より刈り取六七寸程宛にして暖處の土中へ埋め置き春暖に至り取出し六七寸程宛にして植置く時は悉く芽吹出秋開花せり本科は篠刈たる後は木の葉など掛措ざれば宿根せざることあり半草半木の類故へに根に限りありて枯失せり種類懸隔せざれども或にしたなとも半草半木の類故繁茂せざれども五六年にして枯失せり。

コロイチイルウルメイニート　是草の名にあらず手足を以てさはる可からずと云ける和語に通ずとか和漢實名幷に國名ともさらに詳ならず宿根草にあらず春毎に實を蒔き培養す手にていらいければ速に葉伏て程なく復しけり和に至り藤色の花開けり今は小兒の嬉戯となるも嗚呼。

風路　梅枝と通稱せるは紅花雪白の二品なり野風路と云は薄紅大輪なり丈長く篠弱し丹後風路と云ふは大葉にして花篠太く薄色の花開けり櫻川と云ふは小草にして薄色の大輪なり夏より秋まで咲續けり蔓風路と云ふは紅白海色の絞り又は薄色の吹詰あり極大輪なり伊吹風路と云ふは草生異なり枝をかけ極小りんにして薄紅花開けり葉莖とも紅色なり實生ものなり何れも秋咲けれども櫻川のみ夏より秋に至り咲續けり雜種なれども捨置きて可なり。

蔬　紅白紫薄紅或は紅白の絞りあり黄花あり唐蔬と云ふは極大輪の瑠理花なり蕣を嫌ふ草なり捨置き繁茂す。

雪催

草の莖を切ませて用れは虫生せす○黑小地蠶又芽切むしとも云其形ちいも虫に似小く鼠色なり早春の比土中に居て朝など出て草の芽を食よく見て拾ふべし又地中に蠐螬あり此類は皆草の根を嚙切ときは忽枯るなり甚害をなす根圃りの土中を尋て取捨べし虫多き時は石灰を水にてとき澆ば死す暫くありて其石灰に水を澆き去べし○木蟲虫は形長く色黑し林檎無花果などの木の心を喰皮の所へ小き穴を明て鋸屑の如きものを多く出す此穴へ硫黄を粉にして入てよし又針金を穴より入て突殺すもよし又鐵砲の焔硝を捻紙により込穴へさし入火を付れば忽穴の中へ火氣通して虫殘らず死す又虫の穴へ燈油をさしてもよし此虫諸木に付ものなれば能〳〵注意すべし。

草木とも風の流通あしき所には木蝨又あり其きともいふ虫多く新葉の所へ付日々にふへてひしと取卷ときは其芽枯るなり其時は虫の聚り居る所へ烟草の水を度々澆てよし又鰕蠣の骨を燒て煙てよし又麥蕎の灰をふりかけてもよし又常の灰にても度々振べしあぶらむしの生する時は必ず蟻多く聚り虫をふやす故蟻を拂捨へし又鼈甲を其邊へおけは蟻集るを遠く持行て拂ふべし又砂糖を置蟻を聚て取捨るもよし○こ虫といふものあり百兩金、紫金牛、柑橘、橙類の葉の裏に砂の如く小き虫多く付ときは葉落て傷なりつき初りなれば刷毛を以て水を澆き洗ひてよし又柑橘建蘭類に疣の如くにして扁虫を生す群芳譜に是を蘭蝨といふこれを去法は魚洗汁をそゝぎ或は大蒜を摺て水に解筆を以て洗ふべし○土中に生ずる糸虫と云あり形糸の如くにして長サ二三分色白し是は肥强くして濕熱より生るなり草の根を腐かすものなり集り居る所を土と共に取捨てよし○桃樹に生ずる小き蟷螂あり初二分ばかりにして色薄青し箒にて拂ふべし此虫桃實の皮より食入て實を食ふなり○毛虫に種々あり梅桃李林檎などの枝に卵をつけ置なり形鮫の如し冬の内に取捨べし此卵三四月比かへりて虫となり木の叉へ巣をかけ數百やつまりて新葉を食ふ其形あさぎ色にして縞あり是を取法は燈油を筆か布に浸し虫の巣を拭取べし又油をたゝ澆でもよし虫忽ちに死す○樹の根とも或は板塀壁などの日影に綿の如くにして長く産付たる卵あり削さるべし捨置ときは春になりて皆小き毛虫となるなり此類に毛多くありて背に金色の光あるを半夏太郎といふ枝或は樹の皮に居るなり又八九月比櫻桑あかめ柏の類の木又草の葉にも生ずる桑樹あり初は蜘蛛の巣の樣に見ゆ葉を食節を殘して其葉茶袋の如し巣の小なる時に枝を切捨べし其儘に捨置は冬に至て虫みな根もとに下り柏葉の下式は土中に寒を凌で春に至て草木の芽出を食ひ又梅桃林檎等の實を食ふて大に害をなす○

花形大の字に似て白花なり暮秋に開けり大小の草あり葉うら紅なるあり大文字とも方言すゆきのしたの一種なり陰草にして強き草なり捨置きて可なり。

白根葵

葉の形瀧本升麻に似て薄し肥たるは七八寸に生ず薄藤色の四莢の大輪初夏に開けり狀ち美なり極陰草なり賞者野生せるを採得てたづさへ來るを植付る時は生熟して開花しぬれども翌年は忽ち憔悴して花開くに至らず速に枯失せる弱き草なり未だ培養探索せず。

龜甲草

細辛の類にして冬葉流れず春時萠芽して秋に至り四五寸程に花篠出で黄色にして梅花に似たる小輪開花す奏麗はし植替る時は憔悴す陰草なれば一と重覆蓋もて日除するなり糞しは悪しゝ。

ダリヤス

實生のものにして形狀紅黄草に似よりたれども二尺餘に長生し枝多くかけ繁茂し海葉林檎等に一種の毛虫を生ず三四月比一葉巣になり段々ふへて一枝皆蜘蛛の巣の如くになり葉を殘さず食ひ盡すなり巣の小なる時葉を取枝を剪て遠く捨べし其盡置ときは枯木の姿となる或は云此虫後に蠶虫となりて外の木へ移り又實を食て害をなす○菊虎は形螢に似て細長し菊艾類の宿根より生ずるといふ故に菊は古根へ植べからず四月比早朝に出て菊艾の若ばへを吸枯し跡へ卵を産おくなり其吸たる跡二ケ所横に筋あり下の吸めより折取て莖を二ッに割ば中に黄色の長き卵あり其盡におく時は菊の心に食入て蛀となる秋になりて菊俄に枯るものなり○さんせう蟲は形てんとう蟲に似て黒く甲羽あり夏の比に羽麥の花を食又柳に集りて葉を食ふ又酸漿にも集り葉を食ふものなり能注意に怠らず捕ひ捨べし○蝸牛蛞蝓は草木の葉を食ふ事毛蟲の如し遠くへ捨べし○鼠は草木の根を掘あげ害をなす珍重なる植物は竹にて簀をあみ土中に埋み其中に植れば來らず又妙法あり海參を切て所々へ埋め置ば必ず逃去と云海參は蟲を除くものなり○鉢植類に蚯蚓の升るときは水扱悪くなり植物くさるものなり其時か無患子の殼を煎して其汁を澆けば皆死す又生小便を澆けば蚯蚓悪く逃去るものなれば其跡は水をかけて洗ひおくべし。

凡草木に蟲のつきたるときは薤をよく煎しよくさまして筆又は刷毛にてすとしづゝそゝぐべし奇妙にきゝめあるものなり。

接木の事

燕居筆記云接法に六あり一に身接二に根接三に皮接四に枝接五に壓接六に搭接搭接近來四洋より傳來接木は其木によりて時節を能考て接べし接芽接の一法あり春時萠芽にして花篠長し生出大輪の透し百合に似たる金色の花夏開けり手強なる形狀にして美なり花後根分して植易ゆれば多く分するなり。

天麻

枝葉なく蒲色の莖茎を生じて萠芽し蒲色大輪蘭花の如じ肥たるは四尺程に生々する根は甘藷の如くにして横に一根あり實を結ぶ事なく宿根せず其盡枯失して再其處へ生ずるにあらず又幽靈花抔と方言せる一品も此類にして葉はなく五寸程に花篠而已叢生し莖花とも雪白にして硝子もて作りたる如く透通るなり春蘭の形狀に似たる花咲けり二品とも秋開花す枯失せる事天麻に異す此一品は根は非ず二品とも半草半菌にして異品なり。

蘭に似たる黄花に紅色あり秋實熟したる時採て其盡蒔けば忽ち萠芽す春に至り長生して秋開花す。

唐甘草

葉の狀和甘草に似て強し冬も葉流れず春て春時萠芽にして花篠長し生出大輪の透し百合に似たる金色の花夏開けり手強なる形狀にして美なり花後根分して植易ゆれば多く分するなり。

燕居筆記云接法に六あり一に身接二に根接三に皮接四に枝接五に壓接六に搭接搭接近來四洋より傳來接木は其木によりて時節を能考て接べし接芽接の一法あり春時萠芽にして花篠長し生出大輪の透し百合に似たる金色の花夏開けり手強なる形狀にして美なり花後根分して植易ゆれば多く分するなり。

九焦南風天火地火の日を忌べし先其接砧の木は三四歳より六七歳までの木は勢よし又四五歳と雖もこせたる木は悪し十歳餘の木にても勢よきは又接へし大樹へ接とき枝の勢ひよき所を殘し外の枝は皆殘たる枝へ接なり是を高接と云又砧樹を扱て接時は長き根を切はさむがよし又切過れば傷ものなり接梢の事は去年のびたる梢を今年接なり梢は長くのびて勢ひよく肥大なるを切取て接なり又弱木は接たる梢の枯ぬやうにすべし藁にて圍ひ又土藏などへ入置なり風を忌へし又接て跡にて臺の切口と穂の切口へ蠟或は墨などを塗てよし。

飛鳥川といふ物の本にいふ川に流れ來たる山茶の枝を拾ひ返りてこれを接て花を愛せし和尚あり今より百八十餘年のむかしさかも西國安藝の廣島にてのことなり況東海日の出の繁華流行日々新にして昨日の百兩金今日の萬年青明日は定めて松葉蘭石斛などゝ移り行人情を考ふることさすのみことやら名をとりし陰陽師も跳足で逃るな

花形大の字に似て白花なり暮秋に開けり大小の草あり葉うら紅なるあり大文字とも方言すゆきのしたの一種なり陰草にして強き草なり捨置きて可なり。

白根葵

葉の形瀧本升麻に似て薄し肥たるは七八寸に生々し薄藤色の四英の大輪初夏に開けり狀ち美なり極陰草なり賞者野生せるを採得てたづさへ來るを植付る時は生熟して開花しぬれども翌年は忽ち憔悴して花開くに至らず速に枯失せる弱き草なり未だ培養探索せず。

龜甲草

細辛の類にして冬葉流れず春時萠芽して秋に至り四五寸程に花蕚出で黄色にして梅花に似たる小輪開花す姿麗はし植替る時は憔悴す陰草なれば一と重覆蓋もて日除するなり糞しは悪しゝ。

ダリヤ

實生のものにして形狀紅黄草に似よりたれども二尺餘に長生し枝多くかけ繁茂し海棠林檎等に一種の毛虫を生ず三四月比一葉巣になり段々ふへて一枝皆蜘蛛の巣の如くになり葉を殘さず食ひ盡すなり巣の小なる時葉を取枝を剪て遠く捨べし其儘置ときは枯木の姿となる或は云此虫後に蠒虫となりて外の木へ移り又實を食て害をなす○菊虎は形蟷に似て細長し菊艾類の宿根より生ずるといふ故に菊は古根へ植べからず四月比早朝に出て菊艾の若ばへを吸枯し跡へ卵を産おくなり其吸たる跡二ヶ所横に筋あり下の吸めより折取て莖を二ッに割ば中に黄色の長き卵あり其儘におく時は菊の心に食入て蛀となる秋になりて菊俄に枯るものなり○さんせう蟲は形てんとう蟲に似て黑く甲羽あり夏の比に鼎麥の花を食又柳に集りて葉を食ふ又酸漿にも集り葉を食ふものなり能注意に怠らず拂ひ捨べし○蝸牛蛞蝓は草木の葉を食ふ事毛蟲の如し遠くへ捨べし○鼠は草木の根を掘あげ害をなす珍重なる植物は竹にて簀をあみ土中に埋み其中に植れば來らず又妙法あり海參を切て所々へ埋め置ば必ず逃去と云海參は蟲を除くものなり○鉢植類に蚯蚓の升るときは水扳悪くなり植物くさるものなり其時か無患子の殼を煎して其汁を澆けば皆死す又生小便を澆けば蚯蚓悉く逃去るものなれば其跡は水をかけて洗ひおくべし。

凡草木に蟲のつきたるときは莖をよく煎しよくさまして筆又は刷

蘭に似たる黄花に紅色あり秋實熟したる時採て其儘蒔けば忽ち萠芽す春に至り長生して秋開花す。

唐甘草

葉の狀和甘草に似て強し冬も葉流れ殘りて春時萠芽にして花蕚長し生出大輪の透し百合に似たる金色の花夏開けり手強なる形狀にして美なり花後根分して植易ゆれば多く分するなり。

天麻

枝葉なく淡色の莖苔を生じて萠芽し淡色大輪蘭花の如し肥たるは四尺程に生々する根は甘藷の如くにして横に一根あり實を結ぶ事なく宿根せず其儘枯失して再其處へ生ずるにあらず又幽靈花抔と方言せる一品も此類にして葉はなく五寸程に花蕚而已發生し莖花とも雪白にして硝子もて作りたる如く透通るなり春蘭の形狀に似たる花咲けり二品とも秋開花す枯失せる事天麻に異す此一品は根は非ず二品とも半草半蘭にして異品なり。

毛にてすこしづゝそゝぐべし奇妙にきゝめあるものなり。

接木の事

云接法に六あり一に身接二に根接三に皮接四に枝接五に壓燕居筆記云接法近來西洋より傳來接木は其木によりて時節を能考て接べし接六に搭接芽接の一法あり九焦南風天火地火の日を忌べし先其接砧の木は三四歳より六七歳まで の木は勢よし又四五歳と雖もとせたる木は悪し十歳餘の木にても勢よきは又接へし大樹へ接ときは枝の勢ひよき所を殘し外の枝は皆殘たる枝へ接なり是を高接と云又砧樹を拔て接時は長き根を切はさむがよし又切過れば傷るものなり接梢の事は去年のびたる梢を今年接なり梢は長くのびて勢ひよく肥大なるを切取て接なり又弱木は接たる梢の枯ぬやうにすべし藁にて圍ひ又土藏などへ入置なり風を忌へし又接て跡にて臺の切口と穗の切口へ蠟或は墨などを塗てよし。

飛鳥川といふ物の本にいふ川に流れ來たる山茶の枝を拾ひ返りてこれを接て花を愛せし和尚あり今より百八十餘年のむかしまかも西國安藝の廣島にてのことなり況東海日の出の繁華流行日々新にして昨日の百兩金今日の萬年青明日は定めて松葉蘭石斛などゝ移り行人情を察ふることさすのみことやら名をとりし陰陽師も跣足で逃るな

牡丹

都もの多く培養も人皆知る所なれば穂の培養而已書つけ侍りぬ植付べき花園取立播州丹州杯より景草逆送して植付の儘土際櫛細籠より少し延し切詰梅の如くにして櫻の時取翌年秋彼岸景草植付の儘土際櫛細籠巻き悉く鉢を掛け置翌春萠芽の時取挑ふなり附安きものにして外る事なし花の優劣色目を撰び配り接立ける故に花壇中麗し殊に植付の景草なれば初年より性の盛に花開り五とせ程は美なりと雖も忽憔悴し老花となりて本性の花形を失へり実生より養ふ年数は異る事なし根本より発生せる新條を取分け植はしけれども三年にして又本性の花形を現し麗はしけれども咲の年より異す培養の爲めに非ず草の情なれば衰ふ年数は千草萬花と云ふとも繁茂して花形の劣るは牡丹の一品に限れり其憔悴せるを愛へて培養試たる後固圃に置ことを嫌ず名花傾國と李白も美稱したるに非ず

るべし但し接木をするにも古今の差別ありといへども大低切接よひ接等なり但し今はさし接といふことはなす者なしたまゝ時節後れに貴ひし枝などしやうことなしにする人も稀にはあるよしなり偖接べしと思ふ穂を切には極上枝のよく日にあたり實いりよき所を切べし下枝または日陰の枝はよろしからす接たる上をば蔕にて巻かよし其蔕は五畿内及ひ紀州邊より來る綿俵の繩をほぐし噴霧をふき一夜土間に置て用ゆべし昔は麻にて巻たれと今は用ひず土をかくれば早く腐り又接口たかければくびれ込中々すこしも油斷はならず隨分好者に從て會得すべし。

若し同好の友より接穂を貰ひ生憎に劇く接こと手後れになるべしと思はゝ極日陰にて濕り氣の多き所へ横に伏せ土を二三寸もかくる時は十日ばかりは芽のひゞ去なから雨でもかゝるか又は土のかけやう深ければこの格にはゆかず。

代木ようふく芽を株芽といふ其株芽はあなより早く採とゝあしく接だなどはよく接た穂の勢分を見て株芽をとるべし。

穂の八九寸ものひたる時分を見はからひてかくべし別して柑類紅葉櫻をば十月末に接て日當りのよき所へ埋め上へ土を澤山かけ置二月彼岸過になり土を二三度に取のけいつも接木をする時になりて植な

したれども婀娜たる貴妃牡丹花とても目前に衰ふ終には國も傾きなんと嘆歎し諷諫を含める一句なんかされとも和漢とも親愛し異名とも多く就中花王と稱し帝王の訓ある文字を用ひ名たる一品にして古人も美賞したる名花なれば誹謗するに はあらざれとも耆老の癖にして年々歳々花同じからざるを述る而已。

倩培養を考ふるに天時不如地利地利不如人和とか云ふも培養の道亦其意味とても異ることなからんや譬時節至りたりとも囿圃の地味あしければ發生茂育するに至らず時季も能地味ふとも毓ひ齟齬せる時は生熟に至らず況んや盆植に毓をや培養の意味社深し詞毫に述たりとも植易の旬土の拵葵の時季に抔のみにして大凡なり形狀鑑定し水の多少葵の强弱而已ならず嫌嗜種類あり陽草なりとも時季に依り炎暑を避けざれば草育せざる事あり陰草とても是に同じ所謂如保赤子一心を用ひざれば生熟せるほすに大概つくものなり松は寒明につき霜雪を除て土を半分ほどかけ八十八夜過に植直すべし。

若又不榮内にて芽の出すきたを貰ふ時は芽先を小刀にてすこし取捨べし。

換接の事

換接又根接とも云則だいつきなり其仕樣は先ほを大根の切口へさし或は水にいけ置砧樹をきり其切口の鋸めを小刀にてけづり人行こと四五丁程の間を置て接べし但し木口に水氣なき木は直に接てよし砧の木口の方より木の心と皮との間を堅に小刀にて一寸程けゞるやうにへぐなり尤へぐに甚かげんあり木によりて皮の厚きもの あり薄きものあり又大木は厚く小木は薄し若薄き皮を厚くけづりて木のまんに小刀のかゝる時はつかず其時は接口を替てけづり直すべし偖ほに眼を二つ三かけて二寸餘に切片々の皮を心にかゝらぬやうに竪にけづり口に合へし砧のへぎめ一寸なればほは一寸一分ほどにけづるなり外の方の皮よりはすに切捨て其削目の長き方を内にして砧へはさむなり尤砧の切口よりほのけづり目を一分程出してはさめば其處より砧の切口へ肉あがるなり砧太ければ二口も三口も接べし偖其上を打蔕にてもほの動ぬやうに巻なり尤合せ目のすかぬやう

に至らば其滔る所一ならん地に植て育る種類は其場の地味の盛なりとも生ずると雖も盆植に養ふ時は種類に依て培養懸隔せる故に箇條毎に論たれども器水扳の穴なるを善とするは速に漏るれば なり糞一時に引切殘らざる爲なり其上にも鉢植へ赤土の篩たる荒さを赤土而已にして底付る種類もあり又は抄〻擺肩のみにして植付類もあり偖下水の揚土山沙赤土三品を交へ植付る種類多ければ培養誌さゝる個條の類は此土拵なり盆植は都て土の悪しきを專要とするは霖雨の時雨れ甚ざるためなり且又魚糞と現じたるは鮑骨五升瓶抔へ入れ水をたゝへ措なれば日數凡廿日多なれば五十日を經て僧又水等分に割入諸の糞と養覺たら遣ひ切貯なくして俄に用ゆる時は鮑骨湯煮にして冷たる時養ふなり乾鰯抔も養ひけれども鹽味ある故に種類に依ては嫌ふなり油粕を用ゆるものあれども試ずず予が草花を嗜み培養搜索し麁しき形狀專要とし甄味し心を配り蒲芽の頃より鑑定し月數遥以前より花形の優劣を悟り心中を慰め時來り滿開に至りては惟靜安俠眺而已され ば花開かずして心情意慰し文現在に開花の時眼を養ふに至れり是一とせにして一二度の世の眺あるに髣髴したれば齡八旬に近づけば凡一百年間の遊慰に比し實に親愛せる本意ならんが花に耽りて彊增の毫髪鈍考を壯而已。

草木いろは引栽培早見

いの部

金柏　植ころ二三月時分又は八九月の比より指木は三四月ころ。

犬槇　植ころいぶきと同斷。

いづき　植頃二八月九十月時分もよし。

いはら　植頃二八月指木は三月より六月迄。

壁生草　桓根又は枯木等にからまはむる植頃二八月株の類なり。

岩蓮花　植分春秋岩の間に土を少し入て植に卷べしまかし梯砧梅砧などをやはらかに卷ばつかず木にもよるべし偖砧の木口よりつぎめの所を打藤にて包み又紙にて封する法もあり其上を竹の皮にてほゝ障ぬやうに覆ひ雨を防くべし又多く數百本も接には藤にて包たる儘にてほの先を少し土の上に出し皆埋め植て低く平〻葵簀をかけ又圍を張にてかこひ雨風を防ぐべし穂の勢氣を助くるために土をかくる故芽を生するに隨て土をだん〳〵に去へし偖又其たる所へ物のさはる事を忌よく圍ひて鳥獸を防くべし時々根回りを窺ひ砧より芽を生すれは早くかき取へし砧芽多く出れはつかず又穂より葉を生ずる比は見合竹の皮を切去べし移植するには夏の土用を過て秋又春植替てよし。

高接の事

高接といふは一二丈も上の枝へ接なり多く枝の垂る類を接其法は右にさしてかはる事なし但し砧の切口幷び穂の枯ぬ爲に接たる所へ割竹か又茅の類にて圍ひ其内へ土を入穂を少し出し置其上へ少き草を植おくなり是を漏斗といふ又竹の皮の内へ土を入草を植置は日を除けて潤なり又竹の皮の外へ木の枝を添置て鳥の止るを除くべし又節々砧芽をかき取べし又枝ごとに色々接を枝接といふは則ち接分な

壓接の事

壓接の仕方は切接の頃より接てよし又葉を生じて其葉かたまりたる時に接もよし又よび接には時節なく四時とも接事もあり何も接方は同じ事なり先其接へき親木を横へ伏て植枝の地に近き所に砧木を植添へ枝をよびて穂を切放すして接なり但し砧の皮をへぐには小刀を下より上へけづり皮は捨てよし偖其寸法位に穂の皮を片々ばかり溝くけづり合せて接なり跡の手入は前の如し。

身接の事

身接とは夏など接に砧の切口より一寸も二寸も接口をさけて接なり夏は木の勢早く枯くだる故なり百兩金大山れんげほうの木の類はみな腹へ接なり。

皮接の事

皮接とはほにする親木を植かえずして其儘置て接なり是は砧の木を盆に植て式は根へ土をつけ藤つとの如くにして其接べき枝の所へ木を添まかと結付つるし置つくなり藤にて根を包みたるは夏中日々根元へ水をそゝぐへし右何れも切はなすには夏接たるは秋の頃肉あかりて砧木より十分にほへ勢の來かよふを見て先ほの元の所を半分

る肥には白水を節〻かける。
一八植分二八月野土に合肥を用るよし又ごみほこりに植るも可なり。
一輪草植分二八月合肥用てよし。

ろの部　なし

白もくきん植替八月接木は三四月頃辛木にはつくなり。
花丁子植頃秋合肥を用てよし。
白丁子植頃何時なりともよし指木も同斷合肥少し用ゆ。
菰植分春秋野大子合肥用ゆ指木には三四月時分なり。
濱おもと植頃春秋砂に植る此草は濱邊の砂の中に用る故持惡敷物也冬は打わらを以て包たるよし朝日斗あたる所に置べし日蔭嫌ひ又強き日を嫌ふ。
はらん植分二月合肥子砂を交てよし。
はつゆり○はれん○はくせいかう○はるけせう○花菖蒲○はんくわい草○はくらん○右は植分二八月忍土又は合肥に植る

ほど切又數日の後震る半分を切はなすなり然どもよくつきたるは一度々切はなしてもよし。

劈接の事

劈接は松なとはみな此法を以てす總て軟かなる木のつき易ものをよしとす假令は砧の太き指の如くなれは接穂も指の太さにて砧と穂と同し大さなるへし偖砧の切口の正中を少し劃て兩方をけつり穂の方も元を兩方より兩刃にそき砧へはさみ卷なり。

塔接の事

塔接これは砧も穂も同し太さにて砧をはすにそぎ又穂もはすにそぎ合て卷其上へ割竹を堅に添へ其上をまかと卷うでかぬやうにして接めまて土をかけ植るなり。

挿接の事

挿接これは先其接べき穂を長く切取撫をする樣に土へさして其穂の先をよび接の如くにして接なり。

水接の事

此法は其接穂の元を水へ入て挿花の如くにして其先を接なり其いけたる水は二日位に入替てよし右さし接水つきなとは穂早く枯てつき難き類にてよひ接にもなし難きものを接法なり。

根を砧として接法の事

是は先砧にする木を堀其根の勢ひよく皮の奇麗なる所より切採てこれを砧の如くにして接なり大木一本を堀は大木數十本を得べし都て根へ接時は暫く置て土中の水氣を乾かして接へし又珍敷木、ほと外に砧とする木もなければ其木の根を切取て枝となして接べし臘梅連翹なとは根より芽を多く生する故常の砧木の如くにしてはつき惡し根を砧にして接へきなり。

挿木の事

凡挿木の仕方は二三月比にさすものあり或は梅雨中にさすものあり又は秋さすものあり其中梅雨中にさすもの多し總てさすには大風又俄照の日は惡し雨を催したる日を窺ひ日の出ぬ前己の刻までのうちにさすべし其さす枝は梢に勢滿て芽の出さる前又今年のびたる新枝をさすには葉の莖かたまりてさす長サ二三寸位に切葉多ければ二三枚置て跡ははさみ捨てよし尤さす方は奇麗に切赤土の内黄色なる土を煉團子の如くにして其土へさして植是を玉さしといふ又山茶類の堅き木は元を二ツに割て小石を挾み植べし又拇指ぐらひより太き枝をさすには長サ一二尺に切て枝あらば一枝置て跡は皆切捨てさすな

冬中くだし肥かけてよし。
花茄子八九月に種を蒔二月に合肥を用て植替るくだし肥魚洗汁もよし。
芭蕉植分二八月合肥に野土冬中は藁にて包み置べし寒濕に當れば腐る。

にの部

肉桂植替四五月時分野大よし。
錦木植替二八月。
忍冬植分春秋野大に合肥よし垣根にからましむる。
にまき草三月に種を蒔四月時分合肥を用て植べし。
日光蘭○日光きすげ右野土に合肥を交二八月に植分る。
にかい植分二月田土よし常に水を溜べし。

ほの部

ぼけ植替二月八月。
布袋草植分秋野土に砂を交魚洗汁掛べし。消島き草なり木陰に植べし。

星草田土に種を蒔水少し溜る。
鳳仙花二月種を蒔合肥用てよし。
鳳凰草植分春秋野土にくだし肥但日當り能所へ置ば根枯ず。
ほとゝぎす植分春秋野土に合肥。

への部

へくそかづら植分春秋合肥。
蓬草植分二八月野土にくだし肥掛寒中懸たるよし。

との部

唐蓮種は丸き物なり實の尻の方を小刀にて少し削りて清水の中へ入置に十日計にて生るなり時分は三月の頃なり扨て水中にて二三寸に長く延たる時器物に田土を入水を溜て植る、植るは箸にて植べし猶加減あるべし土堅めならばごまめ多く入る土柔かなれば少し入べし常々水を溜べし花咲時は莢のすだれにて口除すべし又糸にて花の腰を二々廻り程卷て置ば盛り久しき物なり。
虎の尾○當蹄○烏頭○唐蓮花○右は野土にさす所の切口は小刀にてけづりたるよし其さす地は赤土の濕たる所にて日陰にさすべし又鉢へさすにも赤土を入てさすべし何も度々水をそゝぎてよし偖よくつきて根を生し又葉を生して其葉かたまりたる時各相應の土地へ植かへてよし。
播州池田在にてはさしめ床とて畑へ花壇の如くこしらへ四方へ巾一尺餘の平石を立にいけて土龍を除るなり夫は花戸の利の爲にすることなれば何程も丁寧にする筈のこと樂にするには瓦をたてゝも板をいけても到底か土龍さへさゝねばよきなり偖このさしめ床の土はずつと下かかたまつた赤土其上に黑土を五六寸いれ其上に細かな赤土を二寸ばかり其上に一寸ほど黑土を敷これは床のかはかぬためなりこの床の上に莚簀かあるひは茅にて日除をするなり又此さしめ床をこしらゆるも六ケ敷おもはゝ古き雷盆の底へ炭を入又赤土の塊にてもよし其上へ黑土を中ぶるびに敷ていれ其上に赤土中ふるひ一寸五六分ほどいれ上に黑土を五分ばかり入て常に赤土の乾かぬやうになし置てさすべし。
凡挿木のきつと付せんと思はゝ二月はじめ挿んとおもふ枝を半分ばかりを削り肉の見えたる時けづらぬ方を皮ばかり削て煉土をすり付紙にて卷竹にても木にても添て置は折ことなし六月ころに至り皮を

に合肥用てよし植分二八月。
どべら植分二三月時分。

ちの部

沉丁花植替二八四五月よしさし木は四月。
丁子草○ちやうれう草○ちた草右は野土に合肥又魚の洗汁掛植分二月八月。
朝鮮蓼○竹ば草右は二月中に種を蒔合肥を用て植る。竹ば草は種取り悪きものなり。

りの部

兩面附○この手拍○からひば○ぼ○白檀○あすなうふ○朝鮮ひば○右何れも同類にて植替何時にてもよろしさし木は四月。
りんどう紫草植分二八月合肥に砂交て日陰なる所へ植べし。

ぬの部

ぬけふし植分二八月野土に合肥用て折〻魚の洗汁を置くべし。

るの部

るかう二月中時分種を蒔隨分はへにくきげづりたる所へ肉出たらはそこから切て床にても鉢にても好にまかせてさすべし其當座はきはめて日陰に置水をあげしと見えたらば鼓贊を一枚下に置へしかくの如くにすれば奇妙によく付ものなりこれを肉さしといふなりとぞ。
凡切はなしおきたる枝は何木によらず半時ばかり水に付置てさすべし然れども竹類、茨るゐ、千年木、きりんかく、さぼてん、萩、萬年青は水につけるに及ばず。
草木ともにさしめの仕方はさのみ替りはなきものなれば冬木は山茶茶梅もちなど、見合せさすべし夏木は梅櫻の類と大概おなじ心持にて間違なし草は菊さぼてん、きりんかく、のわけと同じことゝいふものゝ全躰枝を折てさすは正理にあらず極々すくなきものなりどふしても手にいらぬものなどをふやしたがつてさしきにする人は小利をしりて大損を知ぬ田舍翁の仕業といふべきなり。

壓條の事

總して壓條は木の枝に少しく疵をつけたはめて竹を添てまかと結つけ土をかけ埋置て土乾は水或は人屎へ水を入薄くして灌くべし其疵の邊より根を生ずるなり其根土へよく入たる時枝の元をきり置て後外へ植かへてよし又枝太くしてたわめかたく又枝高くして地に埋め

物なり節々水を灑べし濕を得て生るもあり種を時て四五日の内に生るも有一月二月にして枯るゝもあり來春生る事もあり、つる草なり色々の作り物してからましむるに其如く鰓ふ物なり合肥よし。

るり草植分二八月魚の洗汁折々置べし。

をの部

燕尾草三月頃種を時田土に水を溜べし肥には田土の内へこまめをさすべし。

岡河骨植分二月濕地なる所よしくだし肥

魚の洗汁時に置べし。

萬年青植分何時たりとも苦しからず合肥用ゆ。

大阪鷄頭五月初方種を時合肥を用ゆ。

翁草○おくら剪秋羅○大阪射干○女郎花○小車○おれら草○小手卷○おと切草○おどり子草○大阪紫苑。

右植分二月中野土に合肥用て折〻くだし肥置てよし薬出ては悪し。

わの部

わうばい植替二八月指木は三四月合肥用てよし。

黄耆○黄蓮○忘草○われもかう右は植替二八月野土に合肥時に魚の洗汁掛べし。

かの部

かんぼく植替二八月さし木は三四月。

かやいぬかやも植替二八月指木は三四五月よし。

樫の木植替四五月春冬は枯る。

かぢの木植替二八月。

楓紅葉ん　植替春秋接木は四五月紅葉につぐ。

柑類接木時分は二三月頃なり枳を臺にして接何れも砂眞土よし野土を少し交へくだし肥置たるよし冬は霜除をすべし植替二八月。

海棠植替二八月初方よし眞土に野土くだし肥置べし。

寒菜○苅萱○から玉簪花○唐松草○かせつ○風車○かのと草○かうさんし○がんひ右は植分二八月合肥を以て植正月時分迄の内たゞし肥又は魚の洗汁一二度置

かたき屬は太き竹を以て節を一ッ籠て筒に切て二ッに割おき偖とり木にせむと思ふ枝の皮に少し疵をつけ其きづの所へ右の竹を合て繩にて卷赤土の黄めある土へ肥土を少しまぜ合せすかぬやうに竹の内へ入置此土の乾ぬやうに苦をつけ或は小草を植て節々水をそゝぐべし根の生じたる比を考て竹をとり初疵を付たる少し下の所を半分も切かけ置又竹を合せ前の如くに為て置いよ〳〵根のよく生じたる時半分を切はなして相應の土へ植替てよし又太き枝をとるには鉢の穴より枝を通し鉢の内へ土に肥土をまぜ入て右の如く切取もよし又小科ばへ或は木の根もとにある枝をとるには桶を添置て土を入るもよし又木によりて根にて取事あり其木の芽の出ぬ前に根もとを堀根を切とり其切口を土の上へ少し出てよく肥たる土へ植置は數日を經て芽を生す是はさし木、とり木、より丈夫にして早き仕方なり。

とり木はさのみ習口傳もいらず桑の根芽に土をかけ置根を下したる所を見て切やくること上州桐生近所前橋邊その外何方にてもすることなり夫と同しことにして立木ならはこゝより根をふかして剪とらんとおもふ枝へ前にいへるが如く桶にても箱にても見はからひ補理付て中へ土を入て釣置へし但し切わくるに一年置て剪へし根を下した年に直に剪ては傷むことあり其の手加減かとり木に花さかせ鈴が

秘事なり。

樹木移植の事

花譜に齊民要術を引て云凡樹をうつすに樹の鬚をそこなふべからず根盤を濶くほりて根の宿土をさるべからず諺に云移樹無レ時莫レ教樹知一篤信おもへらく木を植るに春をよろしとすること上にいへるが如しされども若やむことを得ずして夏秋冬の間植はかくの如くすべし根盤をひろくほり細根をきらずして根盤の土全く碎けざれば何の時にても活すといふ事なし古人のいはゆる木をしてしらしむることなかれとはかくの如くにするをいふなり。

凡樹木をほるに大きなる根はきりても害なし細根は少にてもきるべからず根のまはり遠く廣くほるべし小根をきらせしとなり尤根の鬚をきる事なかれすべて樹木をほるにも奴僕には決して任すべからず自らよく見て教ゆべし然らざれば根を多く切ゆへ木傷む植るときは土をつくること實ならざれば枯易し。

若大樹を移植せんには大木は根粗く鬚少き故土もち悪く故に其二三年前時節よき時根を片々掘切回し枝を切詰めおき二年目に又片々を切回し先其所へ植置て細樹を生じて後植替てよし是を轉塚の法といふ大木は枝を多く切てよし方角の向を違はぬやうに植る法あれども

きたるよし。

寒菊植分二月中旬冬暖なる所に植作るべし九月末より上に覆ひをすべし霜の當らぬ樣にすべし肥は二月に合肥魚の洗汁

撥二月より肥悪し。

雁木草二月に種を蒔き合肥用て植分べし。

よの部　なし

たの部

たんどく植分春合肥に赤土を交てよし種は二月蒔き小刀にて皮を削てよし其盤にてははえ悪き物なり扨九月中旬に根を掘出し二三日も干て冬中日の當りて濕なき所に穴を掘り彼根を入れ口を能くふさくべし少も寒氣しみ通れば腐るなり。

多羅葉樹植替三四月なり。

玉椿植替何時なり共よし指木は三四月。

竹の類植替へ五六月よしすへを切て撥ば葉籠る物なり。

れの部

連翹○連玉右は植替八九月指木は四五月植所によりて向の違ともあり一概にもいひ難し木を植るには初より二三寸も淺く植る心得にてよし初より深く植れば必ず傷ものなり植る法は先根の形より大きく堀柔き土を下へ敷其上へ樹をすへ根の回りより細き土をさら〳〵とふりかけ細き木の枝にてよく突込又土をかけ木にて根の下まで土の行わたるやうにつき込て水をそゝぐべし又右の如く細き土を根回りへ入竹か木にていきなから水を多く流す時は土をよく根回りへ引入るなり是を水植といふいづれも植て直に其邊の丈夫なる木へ植たる樹より竹を渡し繩にて志かと結おくべし尤結所は竹へ疵をつけてよし竹は隨分横にわたし筋違ぬ樣に直に結付てよし植替て二三年の内は夏なと土乾たる時は水を度々灌ぐべきなり。

樹木の枝幹を伐事

樹木の枝幹を切には夏木にては林檎桃梅李の類正二月の比芽の出ぬ前よし小枝は小斧或は鎌の類にて皮の損せぬやうに切へし又鋸にて切たる跡は小刀にて削り切口へ蠟或は墨を塗て撥べし其上を油紙にて包みおく冬木にて椎樫冬青の類は二三月比に切へし諸木は皆暑中に切を忌なり田舍にては合抱より上ある木を切ときは跡へ酒を備へおくといふ木なりと雖尊むの意なりといふ。

くだし肥を撥てよし連玉は痛み易き物なり。

その部

蘇鐵植替何時にてもよし第一濕り地悪し砂土に植るくだし肥少し撥たるも可なり蟻の附たかる物なり心を附べし多く蟻つけは必ず枯るなり或人の曰蘇鐵の痛むには釘を打てよし此義分明ならず却て毒になるべし按るに蘇鐵は鐵砂の多き地を得て榮ると云ふ理にや然れば各別なり釘は火にて燒鍛る物なり鐵砂は自然のものなる故其性大に違べし扨て冬は俵をかぶせて寒氣を除べし又は土藏に入れたるよし冬葉を切て撥けば來年葉早く出る又寒國にては冬俵出し俵に包み藏に入れ或は二階などに置春餘寒去て地に植るとは審ならず。

そよぎ植替四五月。

鼠尾草濕地又は田土にくだし肥用て春秋植分るべし。

つの部

盆栽の事

盆栽は土乾す濕すよく下へ水の扱るを第一とす陶盆にても又花盆にても水扱の穴肝要なり其穴は漏斗の如く少も水のたまりなきをよしとす穴の所内へ引込たるは回りへ水滯て悪し穴の所低がよし偖穴を覆に燒物にてもくだき其盤ふせて穴を覆べし文蛤などは鉢により て水抜あしき事あり秘傳花鏡に建蘭を植る法に云用レ盆先瓦片塡

躑躅長生花林抄と云ふ書に審く載たり。

ねの部　なし

なの部

南天植替常によし實は九十月に取土中に埋む二月に取出し日蔭に蒔くべし。夏雪○南京下野　右は植分二八月中旬野土に合肥時にくだし肥もよし。

なもみ三月種を蒔合肥よし。

撫子植分二月末野土に合肥交て三月より前にくだし肥魚の洗汁二三度置き其後は肥悪し植て廿日程過て芽の出るを摘切り捨たるよし大株になる。

らの部

蘭植作り持様の大切は除草に替りて蘭に有故に持人葉の寸尺を取て長きを喜び草立を算へて多きをいむ去ば一と株の草を莖立を減さずして數年持得たるは幽玄にして不思議の第一なり先持様は石臺又は鉢に植る尤も水拔の穴を堀、土は野土に砂多く交て合肥少し入れ植る水の加減に心附べし水過ぎては腐るすべて二月末時分より八九月迄は朝日蔭の蘭の懸置べし時々雨に當るも可なり能茶を煎じて二三日程も置茶酸氣の出たる時根廻りへ懸たるもよし扨十月初め方より土藏に入るゝに土能く濕りを打ちて冬より春迄水懸ず紙袋又は箱に氣の出づる穴を明て置たるもよし暖なる日は藏より出し障子を隔て日に當べし都て冬は仔細なく持つものなり正月末より三月に成除寒去て暖風に成南風吹付れはべた〳〵と腐る春葉ながら根本より拔る物なり南風吹ば油斷なく藏より出し涼敷所へ置べし兎角二月三月の時分大切なり心を附べし其時の寒暑により日向に出し蔭へ廻す事第一の見合なり此大事は傳へ云ふ能はず數年持得ておのづから知べし或人予に問答て曰以心傳心なりと破顔微笑して去る。

むの部

梅の類植替二八月冬もよし葉出て後は痛む物なり切接は十二月中の頃呼接は二月初時分なり喬木には梅よし桃の木は大方はまつ陶盆を下に置植木の根元を以てはんどへあてがひ四方より土をさら〳〵と入土一盆になりたる時に前後左右へ暫く動べし土の空盧のなきためたり植て一兩日多水をそゝぎ或は大雨に逢ことを忌土底後以て煉瓦土一翼レ上とこれ妙法なり蘭百兩金などを鉢へ植るには盆の底の穴を大くして其上を翼に赤土の黄めにてかたまりたる土を

あらく碎きふるひて其篩に殘りたる粗土を入て植れは水を能拔て根腐る事なし物によりて植る土へ合肥を切ませたるもよし總て植る法

附共悪し接穂は常の如くなり蠟の切口を打鍋にて厚く包むべし雪霜の降時分なれば竹の皮にては寒氣通りて悪し指木は十二月初め方より中旬迄切て指なり來三月には葉を出す尤も濕地へさすべし。

木槿植替二八月指木は二月中旬に指すべし。

梅嫌植替二、八月中旬接木は三四月合肥よし。

うの部

うつぼ草植替二、八月野土に合肥用ゆ。

茴香植替二月中旬種も其頃蒔野土に合肥よし。

ゑの部　いの部にあり

のの部

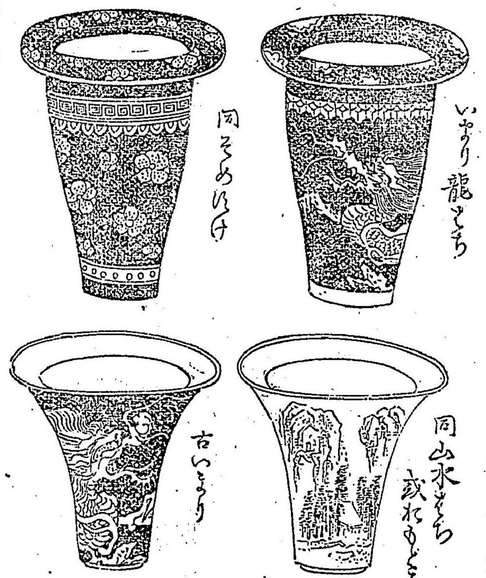
凌、胥植替二、八月松樅の樣成大木にまとひとる物あり○鋸草○野鷄頭○野とま右は野土に合肥植替二、八月

おの部　をの部にあり

くの部

楠植替四五月實は五月蒔なり。

のかたまるを忌むなり肥を嫌ふ草木は年々土をあらたに入替てよし又肥を好む物は土の乾めなる時先土を箸の樣なる物にて和け置よくねかしたる肥を根回りへ澆ぐべし又鉢植を地に置て久く居つく時は水抜の穴より蚯蚓のほりて鉢の内にすむときは必ず濕て終に根腐する事あり節々おき所を替てよし又松蘚鐵の類は棚にのせ置てもま



梶子植替二、八月四五月もよし指木は三四月。

黒もち植替二、八月種は六月蒔。

栗植替二、十月接木は二月中旬接穂常の如し尤打葉にて包むべし。

熊谷草○草蓮花○右植分二月中旬隨分附易き草なり野土に合肥赤土少々許交へ植べし濕地を嫌ふ熊谷草は花のかた見へて植分べし二月頃分ざれば花咲かず。

觀音艸○車三七○黒ひやら○孔雀草○雲きり○右何れも植分二八月中旬合肥に野土、赤土交て用ゆ二月頃くだし肥悪るも可なり。

九輪草七八月の頃種を蒔き合肥に野土、真土に植るべしくだし肥魚の洗汁かけるべし。

やの部

柳植替二、八月指木は正月二月の頃切て指べし葉出てはつかず大木はなるだけ根を切て植るをよしと云ふ。

山吹植替もさし木も二月中旬合肥又はく蟻の付ことあり其時は替く土を取替てよし。

植木盆の事

金生樹譜云盆は人の衣服の如く書畫の襟衾の如く刀劍の裝飾と相似

たり凡人の天生自然たるやたゝ一赤身いかなる具眼の穩婆でもい

附共悪し接穆は常の如くなり臺の切口を打鎚にて厚く包むべし雪霜の降時分なれば竹の皮にては寒氣通りて悪し指木は十二月初め方より中旬迄切て指なり來三月には葉を出す尤も濕地へさすべし。

木槿植替二八月指木は二月中旬に指すべし。

梅嫌植替二、八月中旬接木は三四月合肥よし。

うの部

うつぼ草植替二、八月野土に合肥用ゆ。

曲香植替二月中旬種も其頃蒔野土に合肥よし。

ゑの部　いの部にあり

のの部

浅宵植替二、八月松樅の樣成大木にまとひとる物あり○餌草○野鶏頭○野とま右は野土に合肥植替二、八月

おの部　をの部にあり

くの部

楠植替四五月實は五月蒔なり。

のかたまるを忌むなり肥を嫌ふ草木は年々土をあらたに入替てよし又肥を好む物は土の乾めなる時先土を箸の樣なる物にて和け置よくねかしたる肥を根回りへ澆ぐべし又鉢植を地に置て久く居つく時は

水扳の穴より蚯蚓のほりて鉢の内にすむときは必ず濕て終に根腐する事あり節々おき所を替てよし又松蘚錢の類は棚にのせ置てもま

梔子植替二、八月四五月もよし指木は三四月。

黒もじ植替二、八月種は六月蒔。

栗植替二、十月接木は二月中旬接穆常の如し尤打葉にて包むべし。

熊谷草○草遊花○右植分二月中旬隨分附易き草なり野土に合肥赤土少々許交へ植べし濕地を嫌ふ熊谷草は花のかた見へて植分べし二月頃分ざれば花咲かず。

觀音艸○車三七○黒ひやら○孔雀草○雲きり○右何れも植分二八月中旬合肥に野土、赤土交て用ゆ二月頃くだし肥懸るも可なり。

九輪草七八月の頃種を蒔き合肥に野土、真土に植るべしくだし肥魚の洗汁かけるべし。

やの部

柳植替二、八月指木は正月二月の頃切て指べし葉出てはつかず大木はなるだけ根を切て植るをよしと云ふ。

山吹植替もさし木も二月中旬合肥又はくま蟻の付ことあり其時は替く土を取替てよし。

植木盆の事

金生樹譜云盆は人の衣服の如く書畫の襟補の如く刀劍の裝飾と相似

たり凡人の天生自然たるやたゞ一赤身いかなる具眼の穩婆でもい

だし肥よし。

藪細葉植替三、四月野土に砂交てよし。

藪柑子植替二、八月一所に且つゐつまつて植たる吉し日蔭に植ゆべし。

まの部

松の類植替何時成共よし其内蘇松は二、九、十月植替てよし消真土よし。

まさき○またゝび　右植替二、八月指木は三四月よし。

眉作○眉はき草○松本仙翁　右植分二、八月野土に合肥冬中くだし肥二三度用ゆべし。

まり子ゆり植分二、八月中旬野土に赤土等分濕地を嫌ふ波易きもの也。

けの部

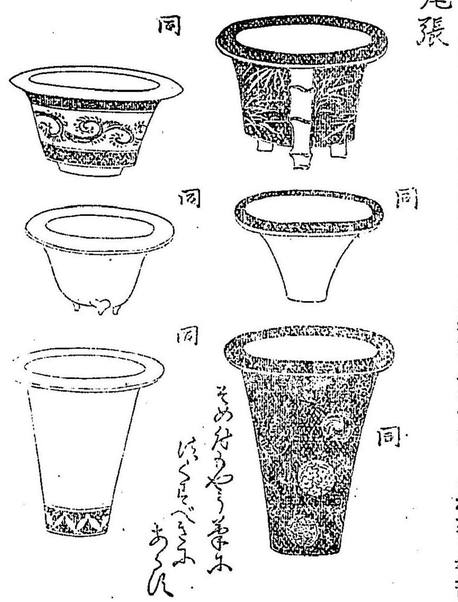
けいたん植替四、五月。

けんげ草植替二月初め方合肥用ひてよし。

けまん草植分八月中旬合肥に忍土交てよし

ふの部

つれか姫姜にしていつれか炊婢といふことを見分べけんやたゞ衣服の章ありてのちに其品天地とわかるゝに及では生育の癡呆にさぐらせても綸子の縐に木綿のはき〳〵雲泥萬里にへだゝるが如し書畫の尾張



へかしいかなる神品名物たりともかならず蜀江錦か古機の純子で裱補し象牙の軸備てのち以て床に揚て是を賞鑒すべし刀劍の如きもまた然り竹杖の仕込下坂は敵打の隠し所木綿真田の柄に正真の正宗

福壽草植根九月中旬に冬暖なる所見立てゝ合肥を以て植上に踏たる蔬を四五寸厚く置べし十二月頃より生出る雪霜の當らぬ樣に覆ひをすべし。

芙蓉冬の内枯る物なり十月頃堀て土藏穴藏に入れ又冬暖なる所へ植替て置もよし二月末に取出し合肥を以て植る土より三寸程置て引切り指木にすべし八月は花咲くなり。

ふつ草○風れい○右植分二月野土に合肥よしかつらなり垣根にからましむ。

冬牡丹植分萬事常の牡丹の如くなり六、七月時分根廻りを堀て合肥置べし八月中の頃馬糞を根本より一尺四方の外に置べし九月の頃より右の馬糞を根本邊へ寄て置なり。

藤植分九十月二月もよし接木は二月中肥には酒糟を根を堀て入べし花多く付たる年は短く下る物也故に二月頃五ッ花は二ッ程取捨たるよし早く取たる程よし。

葡萄植替九十月春もよし合肥用て砂真土は高野山の麓に世を忍ぶ時のことにして今は黄銅の胴鐶かけた脇差は名主の供に侍り銀の太刀拵へは大方道中仕の脇の物となるが如し總じて其こしらへに其品自然と備るものなれば百兩金何ぞ八文の黒つばに三寸の根をかゝめて時に遇ざるをなけかしむべけんや。

盆臺の事

臺は植木鉢を莊嚴するの具なり鉢と見合て心を用ひたし其釣合悪ければ乞食に朱椀の笑ひを招くべしされど何程の盆に植られいかなる珍木にて製したる臺へ飾ざるれども草木に植

べし葡萄は主人の衰ふるを知て心槃と云り。

この部

こぶし植替二、八月。
高野槙○五味子植替二、八月。
小手鞠植替二、八月指木は三、四月。
胡椒植替三、四月。
小蓮花植替二、八月田土に手を溜肥はごまめを用ゆ。
こうおう草二月中旬に種を蒔合肥にて植分てよし。
こしほん植分二、八月野土に合肥を用ふ。
午時花二月末に種を蒔き三寸程に成時合肥を以て植合すべし時々魚の洗汁かくるべし。

えの部

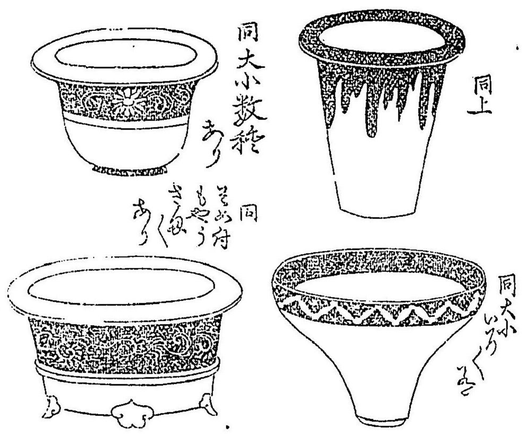
江戸梅嫌植替二、九、十月もよし。
槐植替二、八月。
えび根草植分二、八月野土に合肥冬中よりくだし肥三度用ゆ。

ての部

の眸になりて思へば山野の廣土に根を安くし天地の氣運に從ひ風雲霜雪に養なはれ鞏天の稍を快く拂はんとせしを尺寸の盆に蟠龍の根を屈め剩へ床に置れて天氣を離れることさぞかしつらく あらめ此を思ふて夜は必ず屋外に出し天地の養を恣にうけさすべし。

新年の飾附盆栽の事

萬家新年を迎る備物の賀盤に柏と橘つみて百事大吉と祝したるは柏枝と百事の音通ひ橘と吉の聲同じきより借假して當年を祝せしなり然るに此冠棚には○福壽草の萬

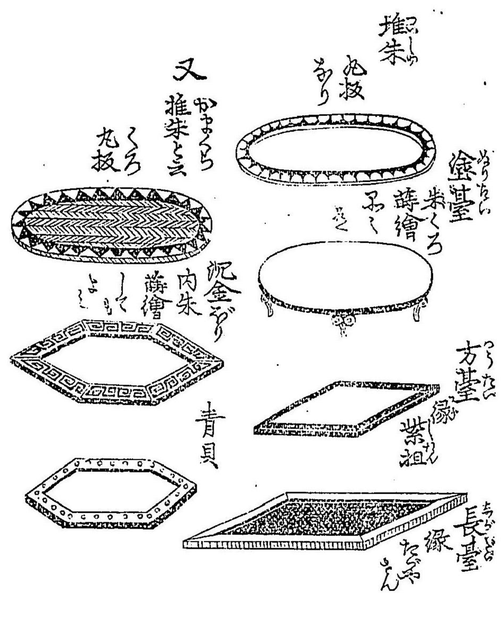


定家葛植分何時なりともよし枯木又は岩石にからましむ。
天南星植替二月八月野土に念土交てよしくだし肥用ゆべし。
鐵線植分二八月なり竹木又は垣にからましむ四、五月の頃かつらを地にはわせ所所へ土をかけて置べし節々より根出る二月分て合肥にて植べし。

あの部

あせぼ植分二、八月。
あけび植分二、八月竹木等にからましむ。
紫陽花○あま茶○右植分二、八月指木は四五月時分よし野土に合肥用ゆべし。
あらせいよう二月末に種を蒔き合肥にをくべし二三年にて花咲くものなり。
あつもり草植分二、八月消易き物なり野土に合肥時々魚の洗汁かくべし。
あわもり○あわゆき○あわ穂　右植分二八月野土合肥よし。
葵七八月種を蒔き二月頃合肥に植べしくだし肥用てよし。

年青○百兩金○蘇鐵の賀度ものを飾る何ことかこれに增るべきや。



これは三色に組立たるものなり○福○祿百兩○壽萬年の床飾りとは申なり。

さの部

柳植替三、四月指木も其頃よし。

山椒植替八、九月接木は二月末時分原地に植べし濕地に置けば枯るゝものなり。

さつき植作様接指木長生花林抄にあり。

柘榴植替二、八月。

澤車○慈草○さきやと○右は田土に合肥を交ぜ常に濕りのある所に植べし器物に田土を入て植たるもよし然れども水多く溜たるは悪しゝ根腐る水草にはあらず濕草なり。

きの部

伽羅木植替何時なり共指木は三、四月なり。

玉蘭植替八、九月。

桔梗類植分二月末の頃根を堀て合肥に植べし草立土より三四寸程出たる時一寸程切て捨たるよし脇より數多芽出で大株になる物なり切捨ざれば只一本立にて草立長く延て見悪し其内にもあふき桔梗は切たるは悪し。

又これは五種に組合せたるものなり。

新年の賀盤　柏と橘を

ぎこく百事大吉と祝し

たるハ柏枝と百事の音

通ひ橘と吉の聲同

―きよう借假し

て當年を祝そ

然るゝ此冠柳ハ

福壽草　万年青

百両金　鐵蕉

の賀慶何ものこれふ

増るへき

四時の七種の事

夫七種は春と秋との二つありて秋の七種はいとふるく萬葉集にも出てよく人の知ところなるか文政年間大岡雲峰翁四時のなかめにあかぬものを七種撰びて常盤七草と號して當時の有名家の狂歌の讃を加へ同好に送りものといふを左に畧ぐ。

麒麟草○雉子隠○雉子の尾○きらん草○ぎぼし○きん風花○きすけ○右植分二、八月合肥植べし冬より二月迄はくだし肥魚の洗汁用てよし。

きんせん花植替何時なりともよし又種も毎月蒔ば年中花たえず合肥よし。

きけまん種を八、九月にまく冬中くだし肥かくべし。

ゆの部

ゆづり葉植替四、五月。

ゆわう草植分二、八月合肥よし。

虎耳草木蔭又は木石等に植てよし。

めの部　なし

みの部

深山蜜植替四、五月分木も其頃よし木かげは悪し照る所に植てよし。

みやうか草植分二、八月野土に魚の洗汁用ゆ。

水葵二月末に種を蒔く田土を器物に入て蒔くべし苗生て二三寸に成迄は

○雉子筵「あひねするとこはの草の雉子筵四季ながら野にかれす見えけり　眞顔

きれいな種さ

福さう　禄百両　寿万年青

の床かざりとかう

水を溜るは悪し只、濕の絶ぬようすべし四五寸程になりたる時又器物に田土を入一ト株づつ植べし常に水を溜てよし肥にはごまめを根へさすべし。

ゑの部

沙羅双樹植替二、八月。

下野植分二、八月さし木は三、四月。

ゑゆん菊八月中旬に種蒔て二月中旬の頃合肥を用て植べし又毎月種を蒔けば年中花絶ず。

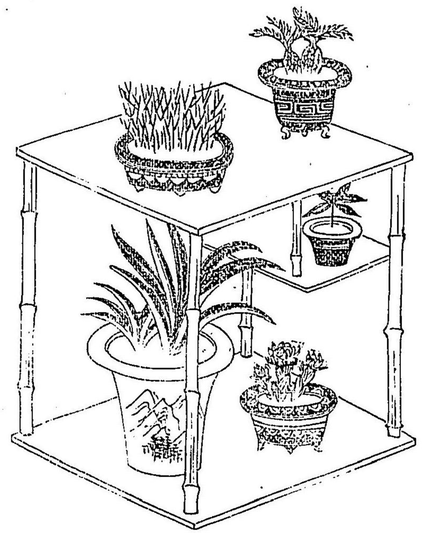
ゑゆんらん。植分二八月野土に合肥赤土等分日蔭に植べし。

ゑぼん○ゑやかう草○鳶尾○ゑうめい菊○右は植分二、八月野土に合肥用て冬中に紫蘭植分八、九月忍土に合肥を切交冬中はごみぼこりかけて覆べし。

ゑのぶ日蔭の石の上枯木などに植てよし。

ゑやくなんげ植替三、四月八月もよし。

ゑゆろ植替何時なりともよし浅く植たるよい立種ふくミ合さゝく



○雪の下「猫ならば雨にならんを雪霜にこしてもかれぬ　石樹

虎の耳草

○吉事草「こがね華さく陸奥の名に愛て吉事草とてゑろかねのはな　焉馬

○藤撫子「おひたくば岩の肩にもおはれなむ藤なでしこ

がよし深きは根へ水を含んで枯るなり。

四季燕子花四季共に暖なる所に田土に合肥等分水を少しづゝ溜るべし水深ければ冷て咲出ず時々ごまめを指べし又ごみぼこりを入たるも可なり。

ゑろ竹植替二、八月冬痛む物なり陰分寒濕に當らぬ様に十月末より藪の内に入て置べし植様は砂に野土を交て植べし。

ゑの部　ゑの部にあり

ひの部

びやくゑん○ひむろ○檜台は植替二月八九月も可なりさし木は三、四月なり。

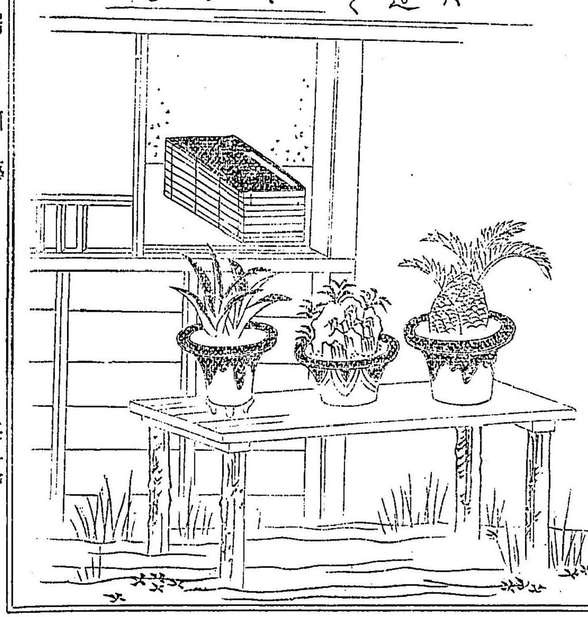
ひやう柳植分二、八月さし木は三四月。

ひんの木植替四、五月。

柊ひさゝ木植替四、五月。

姫鳶尾○ひごたの○姫ひごたひ○の霜にはうと母　京山

○すみれ「紫のすみれつまむと赤人も美とりの野邊にひとよぬにけり　岡山人



射干　右植分二月中旬合肥よし時々魚の洗汁かけ又くだし肥かくべし。

美人草　八月中末に蒔く尤冬中暖なる所へ置き春になりて花壇に移す時合肥用てよし。

日向葵　二月中旬に種を蒔合肥よし。

皷子花　植分二月末合肥よし垣にからましむ。

ひとつ葉　植分二月、八月石上柿木に植べし。ひるむしろ水草なり田土にごまめ水溜てよし。

桃の類　植替二、八月接木は二月中旬接樣は梅と同じ。

もくれん　植替二、八月接時分二、四月こぶしの木に接なり。

もみの類　植替八、九月もよし。

もつこく○もち　三、四月二、八月もよし。

もくせい　植替二、八月四、五月もよし指木とり木は三、四月接木も其節なり柊につぐなり。

○岩桔梗「うごきなき御代を常盤の岩桔梗露もちとせのゆかりとぞ見る　亀山

○かたばみ「あし曳の山吹に似しかたばみの花は霜にもくちなしのいろ　大春

盆置床日覆雨覆の事

近來斯道の好者年を追ひ月に増盛になり意巧さまざまあるべし但し盆栽を樂といふはたとへば小雨そぼふる三月のあした折角萠た青苔を無下に庭下駄の踵にかけらるゝものかは又土さへさくる水無月のころいかに庭かひろく池に蓮花の清風ありとも月額を焦して歩行くもつらし其やうなときはそしたる小座敷の樣より餘り遠からす盆置床を設きて菲布の臥單または蒲筵に膝を養ひあるひは櫻馬場の新烟に相思の情をのへ槐榔や蘆の團扇に風を招き酒客は獨酌一盃詞人韻客は詩歌連俳に想をこらしつゝこれに對し詠めいる時は寸苗の盆山松に百尺龍蛇の勢を起し斑入葉の彩色に時ならぬ霜雪を現はし或は立葉の萬年青の斑に那智布引の瀑布をおもはしむ此所實に價千金不老不死壽命長久の良藥といふへきなりこれ乃ち盆栽の德にしていはゆる登山の具に乏しくといへども居ながら名山大澤の所産をしり一室の内を出ずして長松修竹の趣をしるといふへきものはひと

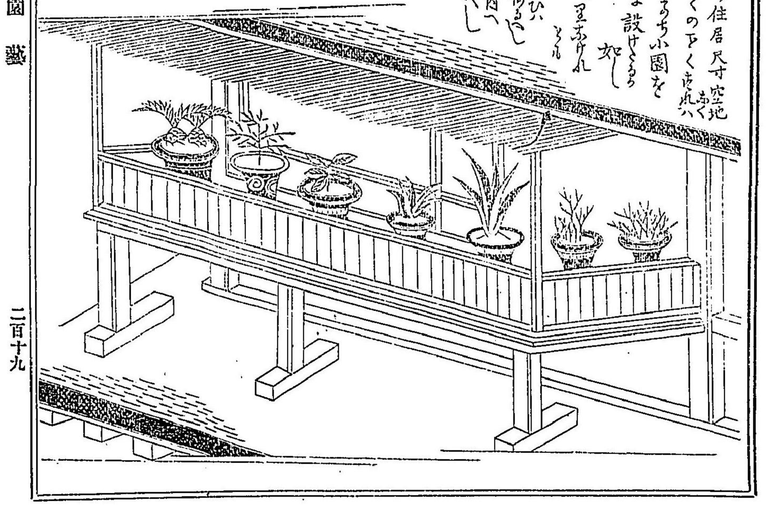
もつかう草　植替二、八月合肥よし。

もちずり、二月時分濕地に植る。

せの部

石菖、石菖は澤山なる物にして又能きは少し其品樣々ある中にも鎌倉石菖と云を上とす先植樣はひもの木にて曲たる器か又は手水の盥の底に水扳の穴を明忍ぶ土に合肥少し交石器物に一ぱい入れ中の少し高きやうにならして扨石菖の手を水にて洗ひ長さ一寸程づゝに切て器物の中より段々植て日蔭なる所に上に簾をかけて置き可成的繁く植たるがよし四五月に植たるは來年の三四月頃に器物を破り捨見れば白き根計に成てからむ夫を水鉢に入れ葉をすかし箸にて葉をなで艶を出す箸にてなづるに心得あり先づ箸の先を細く削りて和かなる紙を卷き辨き水にひたして石菖の根本より葉上迄撫る葉末外にねたるは内になる樣に又内へ曲たるは外へねせる樣に箸を遣ふ心得大切なり時々手かけ見るべし兎角毎日箸にてなづれば葉りこの盆植によりてなりしかる時はこの床も又等閑にすへからず。

又往居か最些ひろくは何そ植てといふは皆植ぬ氣て云たものの其樣な人はたとひ廣庭持ても



色いさぎよくなりて去やんとするものなり常に水をかけて置ば根和らかに成て悪し葉末より赤く枯るも水の過たる故なり只水を少し懸て持べし年を經る程根太まりてよし扨冬は土藏へ入れ時々旭日のさす所へ出したるよし又旭日のさす所に上と脇を寒氣あたらぬ樣に圍で置たるよし霜雪少しも當れば葉枯る二月時分より取出し葉をすかし指南をすべし。

仙蜜萩○煎秋羅類○舛麻○右植分二、八月野土に合肥冬より二月迄の内くだし肥又は魚の洗汁節々かけたるよし。

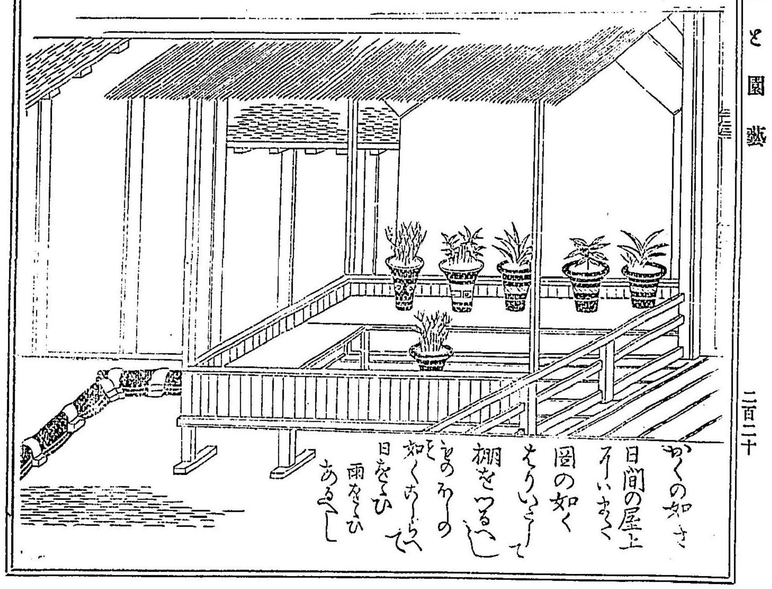
せつてい花植分二、八月合肥に野土よし。

朕なる所に植れば四季に咲くなり。

千日紅二月中旬に種を蒔三、四月頃合肥にて植分る。

石竹毎月種を蒔ば年中花咲合肥に植たるよし花さりたらば根本より切て捨べし又葉ほど花咲く。

石蘭植分二、八月砂野土合肥等分に交ぜ鉢に散べし寒氣を嫌ふ物なり冬は穴藏にやはり何も植いで草茫々またしてもへらぬ口には池かなくてはなる庭の撲樣か出來ぬの山がないの草が茂り過るの竹か付ぬのと無ものの食ふの言たいまゝ是等はみな地



入置べし。

石斛枯木石上に生る草寒氣を嫌ふ物也。

菖蒲植分二、八月田土ごまめ。

すはうの部

すはう花すはうの事なり植分二月。

すみれ草野土魚洗汁を用ゆ。

筋鳶尾植分二、八月野土合肥を用ゆ。

村瀬氏家室并に庭園の解説寫眞

村瀬庫次君は尾張名古屋市材木町の紳商にて書畫骨董を多く蓄藏し好事者にて殊に鹽鐵ありされば先年其家室庭園を新築せんと探古博識を以て江湖上に有名なる元博物局長從三位勳三等町田久成翁に其摹造法を依囑す同翁が凡一ヶ年間の意匠を凝して圖案をなし

態から樣なき衆生なれは度しても好者になしかたし鹹の好といふは家の内に鼠のあるか如しされもこゝは鼠をく所とて造作はせぬともどこをどふするか新宅開のすまぬ内から鼠の嫁入とは實に肝のつぶれたと盆栽の一德には軒に一尺の

したるものにて編者該家に因縁あり て某年此室にて茶菓を喫し酒饌の饗應を請し折室内はいふも更なり庭園を隈なく一見なしたるが今其重だたる一斑を記さんに書院は西行物語の繪卷物に摸たるもの床は豊太閤の聚樂亭の形を摸したるよし一面の張附は吉川弘道の揮毫になる金粉にて吉野人目千本の櫻金光燦爛とし て人目を驚かせり貝原翁の大和巡覽記に云吉野より少し口東の方に山のさし出たる所あり櫻の盛を此あたりよりその谷の内へまへより向ひ左より右の凡方二十町ばかりたゝ一目に見えて皆花の林なり而白きことたとへていはんかたなし此所花の所々に咲ほころびたる粧ひ浮世のものにやとあやしまる云々げに其所とその時とにあらざるも此床を詠れば其地に遊ぶの心地ぞせらるゝなり又書院の傍らにある井戸弁に其天井こは泉殿

すれば忽に遠山峻嶺の精英を招くべし植こみの枝にさゝかにのふるまひ棚をつれば盆に千里の遠きを寫し日間の日影疎くとも風入をよくすれば枝葉に虫の通ひ路をとゞめ板屏に鼻をつく三尺の路次せましとも盆架と

の構造をうつされたるもの又此階段の欄干は淀君の時雨亭の形狀を摸たるものなりといふ。

抑泉殿といふは春湊浪話を按ずるに昔は宮殿には泉殿といふものを必ず造られし事はありし月輪殿の泉殿徒然の畫卷物に見えたり又鎌倉殿中の差圖に能舞臺并に橋がゝりを圖して是を泉殿と書たり云々書院の前面に立たる水盤は京都五條橋の欄干にて天正五年八月と鐫たり又燈籠に利用なしあるは水戸秋田城之介城中に掛りありたる橋の凝寶珠の付たる欄干にて永祿五年と鐫みあり此他奇石珍樹數多あり偖又庭を右廻して綠樹重陰の所にある茶室は山城宇治の上林某方の松存亭金森宗和のよしにて貴人招待の出來得る好なりけり市街紅塵紫埃の中と雖も此室に入るときは四隣寂寥として塵なく身は仙境に遊ぶ如し同地城南には古くより俳

はさのみ好ましげなく箒に蒭芽の傷んことを思はんより盆栽なるかなあ

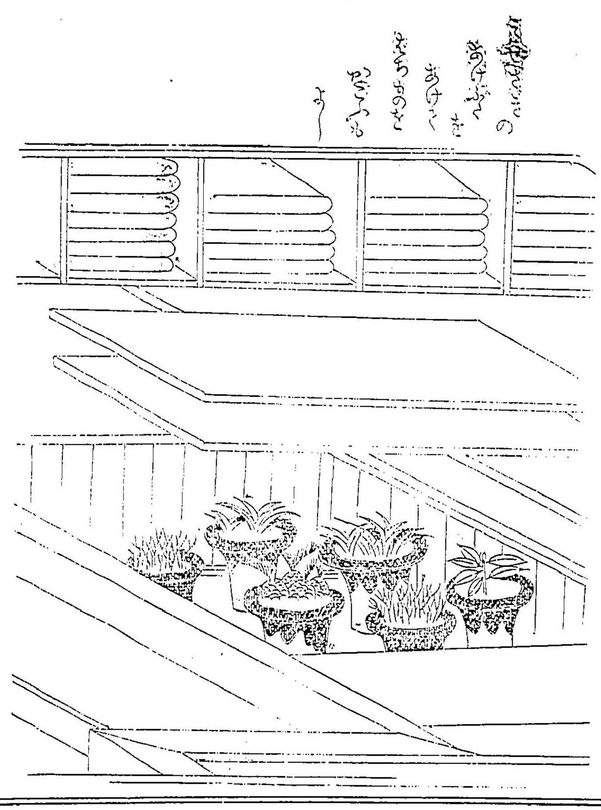
あ盆栽の祖師ともいふべき佐野源左衛門常世かゝる靈妙不測の良藥を求

家曉窯翁の住居せし龍門或は醉雪樓などいふ有名なる庭園はありつれど今は耳遠く知れる人も稀なるが此村瀬君の家室庭園は專ら世人の稱美する所なりとされば知人の紹介を求め或は刺を通じて一見を乞ふ者も多しとかや。

好事園藝家

福羽逸人

編者曰く君は安政三年石見に生る、幼時佐々布逸三郎と云ふ、福羽美靜子に養はれて名を逸人と改む、明治五年上京し、培達義塾、工部大學の豫備校及横濱縣立修文館等に入り諸學を修め、次で津田仙氏の學農社に入り農療及三田育種場等より轉じて同十三年播州苟潛園長となる、同十九年佛國に遊學し、モンペリエの園藝學校に入る、後ち園藝調査の爲め佛國南部地方より始め以太利亞、獨逸、白耳義を巡檢しヴエルサイユ園藝學校に入る、後ち英國、及米國東部を巡回しカリホルニヤ地方等の園藝調査を遂げ二十二年歸朝す、二十三年農商務省技師試補となり農科大學講師を兼ね、二十四年宮內省御料局技師に轉任し新宿植物御苑主管を拜命す、（大學講師如故）是に君の佛國滯留中、萬國博覽會開設ありしを以て我政府より我邦出品の事務官を囑托せられ、又佛國政府は君をして佛國園藝部の調査官たらしめしが其の功に依り二十三年三月法朗西共和國農事有功勳章を贈與せらる、著す所甲州葡萄栽培法、伊豆七島巡回記、紀州柑橘錄、果樹栽培法、蔬菜栽培法等あり、本篇は代我等が爲に殘し留め藝を延る術を傳へられしはアラありがたやゝ。



暖室の事

暖室は陽地の花木を陰地にて持が爲に工夫なしたるものなれば近來は泰西の法に則り四方天井ともに硝子張にして蒸氣の温度をとりて暖國の植物を養ふなれど此はあまり大行すぎて慰みになり難しされば何にても暖室がなくてはならぬといふにあらず或好者は南向の椽の下をかこふて暖室とし萬年青や松葉蘭數品を貯藏し又は押入の中を補理て火鉢の陽氣をかりるとは偖も巧たり案じたり又一人の好者は長持の中を厚紙でばりこれを名付て持退暖室といふ然も五六百盆を蓄へたり宗祇法師が不斷いひとゝたゝすき玉へ〳〵ア、誠に好こそものゝ工夫はよけれ。

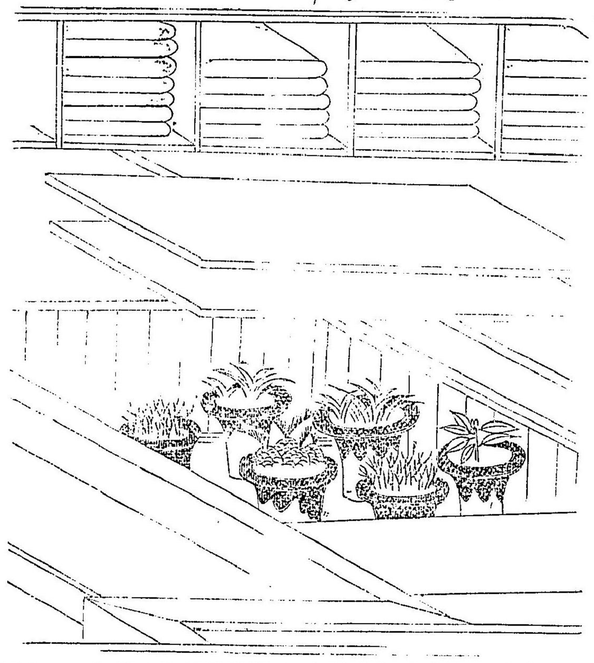
偖又暖室を拵造せねばならぬ場合なりとてさのみ乙甲にするに及ばず九尺に六尺ばかりの塗屋ひとつ南向でも西向でも東向でも心次第場所次第その序に軒下へ唐窖を作りかけ置べしまた唐窖は南向にすべし暖室でなければならぬものは萬年青、石斛、蘭、松葉蘭、をよそ冬木の中でも霜雪にいたむもの南天、雨金千兩、萬兩福壽草火蕉の類樂もの實もの殊に唐窖でなくては枯るものは扶桑花山丹花日々草野牡丹茉莉花使君子天人果千年木きかんかく石花かくさぼてん濱ゆもとはじかん木松はらん但し唐窖は晴天には障子はかりにして日をあて午後二時すぎより板戸をかけ障子の蔦を二重も三重もかくべし

家曉翠翁の住居せし龍門或は醉雪樓などいふ有名なる庭園はありつれど今は耳遠く知れる人も稀なるが此村瀨君の家室庭園は專ら世人の稱美する所なりとされば知人の紹介を求め或は則を通じて一見を乞ふ者も多しとかや。

好事園藝家

福羽逸人

編者曰く君は安政三年石見に生る、幼時佐々布逸三郎と云ふ、福羽美靜子に養はれて名を逸人と改む、明治五年上京し、培達義塾、工部大學の豫備校、及横濱縣立修文館等に入り諸學を修め、次で津田仙氏の學農社に入る、明治十年內藤新宿勸農療及三田育種場等より轉じて同十三年播州蔬園長となる、同十九年佛國に遊學し、モンペリエの園藝學校に入る、後ち園藝調査の爲め佛國南部地方より始め以太利亞、獨逸、白耳義を巡檢しヴエルサイユ園藝學校に入る、後ち英國、及米國東部を巡回しカリホルニヤ地方等の園藝調査を遂げ二十二年歸朝す、二十三年農商務省技師試補となり農科大學講師を兼ぬ、二十四年宮內省御料局技師に轉任し新宿植物御苑主管を拜命す、（大學講師如故）嘗に君の佛國滯留中、萬國博覽會開設ありしを以て我政府より我邦出品の事務官を囑托せられ、又佛國政府は君をして佛國園藝部の調査官たらしめしが其の功に依り二十三年三月法朝西共和國農事有勸章を贈與せらる、著す所甲州葡萄栽培法、伊豆七島巡回記、紀州柑橘錄、果樹栽培法、蔬菜栽培法等あり、本篇は代我等が爲に殘し留め書を延る術を傳へられしはアラありがたやく。



暖室の事

暖室は陽地の花木を陰地にて持が爲に工夫なしたるものなれば近來は泰西の法に則り四方天井ともに硝子張にして蒸氣の溫度をとりて暖國の植物を養ふなれと此はあまり大行すきて慰みになり難しされば何にても暖室がなくてはならぬといふにあらず或好者は南向の椽の下をかこふて暖室とし萬年青や松葉蘭數品を貯藏し又は押入の中を補理て火鉢の陽氣をかりるとは偖も巧たり案じたり又一人の好者は長持の中を厚紙ではりこれを名付て持退暖室といふ然も五六百盆を蓄へたり宗祇法師が不斷いひことゝたゝすき玉へ〳〵ア、誠に好こそものゝ工夫はよけれ。

偖又暖室を構造せねばならぬ場合なりとてさのみ乙甲にするに及ばず九尺に六尺ばかりの塗屋ひとつ南向ても西向ても東向ても心次第場所次第その序に軒下へ唐窰を作りかけ置べしまかし唐窰は南向にすべし暖室でなければならぬものは萬年青、石斛、蘭、松葉蘭、をよそ冬木の中でも霜雪にいたむもの南天、兩金千兩、萬兩福壽草火燕の類葉もの實もの殊に唐窰でなくては枯るものは扶桑花山丹花日々草野牡丹茉莉花使君子天人果千年木きかんかく石花かくさぼてん濱おもとはしかん木松はらん但し唐窰は晴天には障子はかりにして日をあて午後二時すぎより板戸をかけ障子の薦を二重も三重もかくべし

過日大隈伯邸内に開會せし日本園藝小集會の演說なり。

さて日本園藝會と申しまするものは諸君も御承知ある通りに我が園藝の改良進歩を計る目的を以て設立致した所のもので御座ります其機關として毎月園藝雜誌を發行致して居り又時々集會を開きまして園藝上の知識を擴むる爲に演說講話等を致し來つて居りまするで御座ります併し未だ會員も餘り多く御座いませんので尚ほ充分に會務の擴張も出來た次第ではありますが花房會長の盡力に依りまして追々本會の目的に達せんとする機運には向つて居るので御座ります然るに此の園藝と申すとに付きましては世人が往々其の區域範圍を知らぬ所からして只無益贅澤業か左なくば緣日植木屋位の仕事であるかと云ふ樣な觀念を持つて居る人が多いと認めます併し吾々が今日園藝と申すはそんな區域の狹いものでは御座りません又決して無益の贅澤業ではないのであります今試に園藝と云とに屬して居りまする分科を一つ御話申上げて置きたいで御座います。

凡そ園藝會と云ふ熟字は西洋輸入の新文字で御座います即ち醫譯語であるのであります而して此業に屬する所の分科は事實の上に於て我が國に在て古より成立て居つたか又成立て居なかつたかと云ふことを一つ擧げて見ますると皆是は成立て居たので御座いますが併しながら其一部分は普通農事に屬して居り其の一部分は園藝として知られ居つたと云ふ樣な有樣であります然るに今日吾々が園藝と申す所のものを擧げて見ますると五つの分科より成て居るので御座います其第一は果樹果物を栽培するとである第二は蔬菜を栽培するのであり第三は花を培養するとであり第四は實種及び樹木栽培即ち選種の事及庭樹の類などを栽培するとか其第四に敷ふべきものであります第五は造庭術のことで即ち庭園の事であります此五ツの

暴ふでであろうと思ひ過し資朝卿じやなけれども堀いだして棄る人あり棄たとて元の野山へもどるといふでもなしあゝこれ何といふ心ぞや好者のこゝろはずつと替たものなり先第一に草木の性質をよく考へ山にあるもの野にあるもの各その土こしらへに心をつくし又暖國と寒國との氣候を丁寧に懸斷り南海の草を東海の暖室に養ひ彼をして東海たることを忘れ本國のまゝに繁昌さするはさりとは好の妙神に通ずといふべしこれは近比餘計の冗言ながら筆の序にしるす。

肥料の種類製造の事

○肥土又臘土ともいふ拵る法は年々耕作する山畑の土へ冬至の後人糞をそゝぎ寒に凍させて乾し又糞をそゝぎて乾す畢三度其後雨にあてぬやうに貯置春分の比日中にさらし度々切替て其時よく虫蟻の類又草の根芥の類を捨てよし是をすて置ばむれ腐て地虫蚯蚓の類を生して害をなすなりこれを諸の草木菊などを植るとき交合て植るなり。

○三和土地錦抄に合肥と名付其法は野土三升赤土一斗真土一斗右三色をよく雜小砂利をふるひ人糞一斗を煉合せ五十日程ねかしてつかふなり用る時藁灰又は糠を砂で切まぜたるもよし又云南に並木いけ垣煉塀の類高岳などある陰は北陰とて必ず冷氣の地なり一二尺も三

ものを通稱致して園藝と申すので御座います。

從來我が國で果樹或は蔬菜の如きものは普通農事に編入して御座いますから今日吾々が園藝と申す内には果樹もあり蔬菜も有と云ふことを申しますると人々は此の事を聽て甚だ驚き且不思議に思ふ樣な有樣で御座います故に是迄農事に屬して居つた所のもので御座いますけれども今日學術研究の範圍を定めて尙其區域を指定する所からして見ますると云ふと從來農事に屬して居つた果物蔬菜栽培を割て之を園藝の範圍に入れ園藝なる新文字の實地區域を定めると云ふことは私は彼是申すまでもなく至當のことと存じまするので御座います故に我が帝國分科大學抔に於きましても斯の樣に定められて居りますされば此の園藝と申しまするは中々區域も廣く又隱て此の業の奥廢と云ふものは國家の經濟上に大なる關係を及ぼすと云ふことも自ら明瞭と考へるので御座います然れば之れが改良進歩を計るの方法と云ふものは如何にして宜いかと云ふ問題が自から起つて參りますが之れは固より種々あるとでありまして決して一二に限る譯では御座いません既に此問題に付きまして私は本會の大小集會に於て數回意見を述べましたとで御座いましたが尙ほ本日御來會の諸君に向ひまして園藝の改良進歩を計るの一策として私の希望で述べたう存じまするこのが御座います。

是は外では御座いません好事園藝家を殖したいと斯ら云ふ事で御座います好事園藝家と申しますると チト言葉が頑しい樣で御座いまするが今少し之を平たく申しますれば道樂園藝家とでも申しました方が宜いかとも思ひますツマリ本日御來會の方々に園藝道樂を御勸め申したいと云ふことで御座いますチト失禮の申分では御座いますけれども中には何も道樂がなくて御困りの方がありますかと考まかよし何れも人糞はよく腐りたるがよし然るを今俗に寒肥と云て草木何にかぎらず用は品によるべし譬ば虫などは冬中は蟄して食を求めず春暖氣になりて食を求む草木も又此の如く冬は睡るが如し春に至て芽を含む時は覺るが如し此時肥を用ば渦するに水を與が如し大抵芽を生る前に用ゆべし弱き草木などに寒中強き肥を用ば却て傷み腐るものなるべし但し木の類はよろし又移植して直に肥を洗くことは悪し根付たる樣子を見て洗ぐべし。

○人尿は種樹書云瑞香などは濕を嫌ふ根もとに蚯蚓あるときは悉めなり此時小便をそゝげば蚯蚓みな死なり。

○鰌又鰡魚ともいふ肥に用るはほしかといふごまめより大なりごまめも田つくりも皆用てよし地錦抄に云水に入置て腐し用ゆ大方は其盤にてよし花壇綱目に下肥に傷む草木に用ゆべしよく炒粉にして用といふほしかは白にて挽粉にして用ゆべし然らざれば鳥獸などがみなとり食ふの恐れあり。

○洗魚汁地錦抄云魚洗汁は器物にため四五日置て用ゆべし魚の腸は久敗くさらして用ゆ花壇綱目云根に肥の入かぬる草に諸草ともに根回りへ少しづゝ用ゆべし南に日影なく終日乾く所は熱地なり魚洗汁肥をうすくして少しづゝかけたるは陰氣をまして土に濕をふくみ四尺も濕氣のぼるものなり此所は合肥を多く入てよし魚洗汁などは肥すぎて草の性のび立て花のつき兼るものなり合肥は後程段々肥の理なり又云草花は總て冬中より二月中旬まで肥を用べし菜出て用は却て傷若用たくは合肥を用ゆべしかけ肥は必ず嫌ふなりといふ凡草木生て後かけ肥を用も品によるべし又植て後に肥不足に見ゆれば、物によりてかけ肥を用ひてよし。

○溝池の泥並水種樹書云香草などにて糞を用ひがたき物には溝池の土をあげさらし乾てよくふるひ石竹牽牛子の類によし又黑ぼく土を等分に合て櫻草によし。

○廐肥又まやげこいともいふ苗床の内へ入る肥なり其法は冬中人糞に肥すぎて草の性のび立て花のつき兼るものなり合肥は後程段々肥の理なり又云草花は總て冬中より二月中旬まで肥を用べし菜出て用は却て傷若用たくは合肥を用ゆべしかけ肥は必ず嫌ふなりといふ凡草木生て後かけ肥を用も品によるべし又植て後に肥不足に見ゆれば、物によりてかけ肥を用ひてよし。

○溝池の泥並水種樹書云香草などにて糞を用ひがたき物には溝池の土をあげさらし乾てよくふるひ石竹牽牛子の類によし又黑ぼく土を等分に合て櫻草によし。

○廐肥又まやげこいともいふ苗床の内へ入る肥なり其法は冬中人糞に灰をまぜ合せ腐し種を植る時まづ底にて馬の踏たる藁をあつくしき其上へ砂をしき其上へ糞汁をそゝきて諸の菜類を植れば下より温氣のぼる故に早く生るなり又畑へ苗をうゆる時もかくの如くして植れば物に人糞は諸の草木の肥はこれを第一とす久くきくこと他の肥に勝れり何の肥にも少しづゝまぜてよし地錦抄云人糞に水二桶入五十日程置て青き水の如くになりたる時用ると云又かけ肥は雨を催したる前にかけて雨降は別てよし尤冬中肥土へ入るには水を少し割たる

するから先づ園藝家の仲間入をして戴きたいと云ふ事であります夫れで是れより好事園藝家の仲間入をすればどー云ふ功能があるか夫れを一つ御話致しましようと娯樂の爲或は學説等の試驗を目的と致しまして園藝の業に從事致しますする者を營業者と區別致して好事園藝家と云ふので御座います諸君も定めて御察がありませうが即ち當家の御主人其人で御座います蓋し娯樂或は學説試驗或は遠く諸外國の有益植物を國家の利益を增進しようと云ふの目的を以て園藝に從事致しましたならば其樂む所と又得る所と自己の歡喜と身躰の健康とに利がありまして且つ知識を廣めると云ふ利が御座います而して其成蹟は即ち營業者の模範となり或は學術家の參考稗益と化しまして皆な直接間接に此の園藝の改良進歩を促す原素となるものであります又内外人の交際を深厚にする に益があり且つ其の度を高尚にすること が出來るであります今其の一例を申して見ますれば蔬菜の如き果物の如き又花卉の如き何れとも皆な人生欠べからざるものであり又交際上必要の品であります如何に是等の品々を巧みに培養して饒物を作り出しても所謂玉石混淆で貴きも賤しきも之を判別することが出來なかつたならば交際社會に立ちまして餘程侮辱を受けることと考へます又世の進歩と共に風俗は變遷するものでありますれば人の談柄も亦自然一變して園藝談に遷ると云ふことは無論と考へるので御座います例へば室内裝飾の花卉若くは挿花立花の如きものでありましても和洋共に種々の意匠がありまして是等のことは上流社會の人々は固より心得置かなければならぬことで御座います蓋し談柄を園藝上に取るは最も高尚であります、又庭園のことが大關係あることで御座いまして是は屋制衛生とに基きて共に變遷推移しなければならぬものであります都て普通交際のてよし合肥油糟などは悪し土乾き植物枯るものなり又石の如くなる赤土又は燒土出火などにて燒くちたる所は一二尺も土の性なし是虚土なり魚洗汁水肥などにて土を和ひ潤したるがよし燒土はあまり性なく虚すぎて强き肥はなづみて悪し魚の汁を時々かけ米泔汁を節々そゝぐべし又石砂多き地は實地なり忍土を多く切まぜて魚洗汁くだし肥鰯肥油糟等の重くつよき肥は悪しすべて肥過分なるは必植物傷む地肥たるを見ては肥無用たるべし此見合せ第一なり。

○灰窰又は火鉢の灰も人糞に合せくさらしてねかし置山慈姑水仙等に用ひてよし。

○酒糟に粃糠を切まぜ團子の如くに燻貯置遣ふ時に水にて解人糞を合せ藤葡萄などの蔓長く出る物によし又松の勢力あしきに根回りへ入て又繁茂するなり又蓮を植るに酒糟を入れば盛なりといへり。

○油糟は胡麻の油糟をよしとすすべて草木の葉の光澤をよくす故に蘭類に用ひてよし若又此胡麻の油糟なき時は胡麻白胡麻を沙鍋にてよくいり細碎して入るなりとこれは蘭を移植せんとする時になせば尤妙なりと盆栽實驗家の説なり。

○米泔汁は米をときたる水なり蘭百兩金はらん硃砂紫金牛茶等に用ひてよし又香氣ある草木は溝泥水にしろ水を合せそゝぎてよし又溝

溝の灌の土を乾て篩ひ植る土に交用てよし。

○糠は沙鍋にて能炒て人糞にまぜ用ゆ孟宗竹の根に施せば殊に繁茂す。

○馬糞は寒氣に傷む草木によし又暑氣を嫌ふ草にも根回りへ置べし又牡丹の根まわりへ冬の内に多く置てよし。

○鷄糞は菊櫻草等の肥にまぜ用ふれば花の色をよく出すこと妙なり尤諸島の糞はみなよしといへり。

○塵埃は撫子花石菖萍蓬草等の水草に入てよし

○茶滓は暑氣にいたむ草木の根回りへ入てよし南天蘭類に殊によし

盆栽手輕肥料法の事

凡世人日々の業務に鞅掌し寸暇を得て盆栽を以て娯樂の資に供せんとし肥料のもふけなく水はかりを灌ぎては草木繁茂せず其詮なしさりとて居宅狹隘にして肥料を製する餘地なく且尿尿の不潔物の取扱ひも出來ず斯やうなる塲合には左の方法を以て肥料となせは悪臭の氣なく草木に用ゆる良肥料といふべきなり。

生の大豆白大豆を細かに碎き植木鉢の回りの土を掘り置くべし能草木をして蕃殖せしむるなり。

又菜種を臼或は石の上にて能く碎き水に浸し置き一周間程も過て用

談柄を園藝上に取ると云ふは最も汎く世界に通用し易き事柄でありまして此談柄なれば如何なる席上に在りても決して差障りのなきことは交際に熟練なる諸君の能く御承知ある所と存じます。

右に述べました所の人の食物、住居、庭園の品位、程度、意匠と申すものは皆以て文明の進度を卜するに足るものと思はれます例へば此處に人が御座いまして英佛獨の言語を解することが出來なくして是等の國に參りましたと假定致して見ませうが扨て此の人が其の國へ往きまして文明の程度の如何を視察するに當りまして何を以て之を視し之を察することが出來ますか固より言語の通じない以上は之を人に質して其の如何なる目的であるかと又如何なる利益があるかと云ふことを問ふに途はないことで御座いますが只だ斯云ふ樣な人は眼孔に映じたること又舌頭に感觸したる所の事柄を以て自己の判斷を下すより外に術はないことゝ思ひます

ゆべし草木の繁茂は勿論一層葉に光澤を生せしむ。

○硝酸石灰一ポンド○硝酸加里四分一ポンド○燐酸加里全○硫酸加里苦土全以上の原量を四千倍の水に溶解し時々灌漑すべし又細末にして散布してもよしといふ右は某化學家の實驗談なり。

近來花戸の庭園に於て牡丹牽牛子菊を栽培して廣く諸人の縱覽に供すること流行し隨てこれを愛翫するの好者も尠からずされば此三草の仕立方は上欄百花培養考に概略を出しつれど尙詳悉して江湖同好士に紹介しぬ。

牡丹の說并に栽培の事

清少納言の枕草紙に牡丹なく萬葉集に菊なきはいかゝなしてかこの幽雅秀芳の花を作者が撰み洩しけん其心意は推知せされども牡丹は唐土にては我朝の櫻の如く愛賞せられしよしは物に見えたりされば花王の名さへ負せらる本朝寶永の比なりとかや都鄙大に流行し就中江都にては一入盛なりしと云夫にともなはれて種々の變性も出來しかゝ又々近歲に至り槐門貴顯の庭園に奧深く培養せられ好者は其花の名に因て富貴を求るにはあらざれど廣く衆人の眼に觀しめて名譽を博せんが爲に栽培する者多くされば津の國池田の花戸は年々に接木して歲々に奇種珍花の牡丹苗を內國はいふも更なり海外までも多く

是等のことは從來私共の數々實地に目擊することで御座いますが今若しも斯樣なことをして園藝思想ある人に視察せしめましたならば事實を誤らずして利益を得ると云ふことは最も多いと考へます是れは私の實見上に於て大に證明する所で御座います。

又我邦各地に著名なる所の園藝產物此のものに就いての繁殖の由來を尋ねて見ますのに其始めは皆な好事家の手を經ずして成立つて居るものはないので御座います例へば東京近傍に於きまして多く盆宗竹を栽培して居ることは諸君も能く御承知の通りで御座いますが今日笞なり又竹材なり共に必要なる品となつて居ります然るに其の原はと申しますれば島津公の愛翫的移植に始つたと云ふことで御座います又彼の花菖蒲を御覽なさい今日では內外人に多く劇賞せられて每年外國に向つて輸出するものも少なからぬ譯で御座いまして殊に我國の花卉中にては最も輸出するといへり故に池田にては特產の巨利物となすといふ。

牡丹　和名　延喜式にふかみぐさ　はつかくさ　なとりくさ　てりさきくさ　よろひくさ

漢名　丹皮　血檀　富貴花　洛陽花　洛花　夜白色草　花后　寶粧成　伊洛　鹿韭　鼠姑　百兩金　木芍藥

異名分類抄に日重上人聞書を引て牡丹は花の皇なる故にすめらぎぐさといふ抑牡丹の我朝へ渡來せし起原は瀧澤翁の玄同放言などにも見えて明らかなる處なり其言に曰く上古は牡丹本朝になく延喜天曆の比なりけん渤海國の商船創めて舶戧し來りければ牡丹の和名ふかみ草と云（ふかみは渤海の假字なり）崇德帝の御時より牡丹の歌あり植地は寒國に宜しからす東南溫暖の地方に相應しとのことにて當時詔して其根を紀伊、薩摩、安房の諸國へ植させられしと云五雜組に牡丹は牝卉なし宿根より叢生す故に牡丹といふなりとぞ又牡丹を廿日草といふは詞花集に太政大臣忠道公の歌に「咲しより散はつるまで見しほどに花のもとにてはつかへにけり」又白氏牡丹芳に花開花落二十日。一城之人皆如狂とありこれによりはつか草の名起れるならん和漢唱合といふへし偖又牡丹は紅色を以て根本とするものにや本草綱目に牡丹は以二色丹者一爲上雖レ結レ子而根上

も優美なるものでありますが此品は原と如何にして改良せられたかと云へば矢張り好事家なる松平左近吾氏の手になつたと申すことは諸君も能く御承知で御座いませうが皆な斯樣な譯で御座います其他各地に著名なる農産物にても亦園藝産物に致しましても皆な好事家の手を經ずして繁殖せないものはない樣でございます即ち紀州の蜜柑甲州の葡萄とか云ふ類に致しましても何れも其の通りで御座います。

之れを舊藩制の時代に就いて見ますると各藩主は皆な多少物好きを爲さぬ人はない樣でありまして其或は刀劍を好むあり或は美術品を愛するもあり或は庭園に或は盆栽に或は建築に各嗜好を凝して一つの娯樂と致したるもので御座います故に所謂(上好む所下之れに倣ひまして當業者は各其業に勵み大に進歩致したもので其實例は枚擧に遑あらんで御座いますが皆な直接間接に奬勵の道となり又斯の如くして發達せしことは如何にも明白なる事實で御座います又此事を外國の例に徴して見まするに皆其の趣きを一にして居りますが只外國のは民間有力の人が主として之れを爲すの小差があるのみで御座います。

然るに我國現今の有樣を以て見ますると世の變遷と共に舊藩主物好きは廢りて殆んど其痕なき次第であつて偶々是れあるも無益である或は贅澤であると呼ばれて居る樣な譯になつて居ります成程無益と申しましたならば無益に似た樣ではありますけれども蓋し間接に公益のあることを知らぬ論と思ひます又贅澤と申しましたならば贅澤に似た樣なれども贅澤と云ふものは文明の花であつて果實であると斯う思へば宜し凡そ贅澤の出來ぬ位の人民では國の文明は迚も望まれぬと考へます故に我々は勉めて公益ある贅澤を學ばずでは叶はぬと存ずるが諸君如何で御座いませうか。

生レ苗故謂ニ之牡丹一とあり紫色なるを紫牡丹白色なるを白牡丹といふしかも草木の花牡丹より大なる物なければとて唐土人は群花の中牡丹を以て第一とはなせしなり張元素が曰く牡丹乃天地之精爲ニ群花之首一と故に彼土にては例の花王と稱し衆花の長たりと云又花の尤富貴なるものはとて富貴草ともいふ神農本經に據るに此花は上古よりあり唐の世盛に之を賞す。

牡丹の種類は歐陽永叔洛陽牡丹記には其種類四十餘種秘傳花鏡には百三十一種群芳譜には百八十三種を載たり本邦今は千餘種の多きに至りしといふ蘇東坡も曾て此花を愛せしにや牡丹を見るには巳の時宜し巳より後は開過て花の精神衰へ力なく麗しからず午の時より後に見は牡丹を知らざる俗客なりと又地錦抄には古人牡丹を見るに法を立たり其好事雅賞に堪たりといふべし左に記す。

抑牡丹は總躰を九品に分て見るへきものとす其九品といふは一に位二に形三に色四に重五に實六に蘂七に葩八に葉九に木なり。

一、位といふは其木の品格及花配り木振等をいふなり。

二、形といふに五樣あり富貴、艶麗、嚴格、亂縫、枯槁なり即富貴艶麗をよしとす。

三、色に二種あり咲出るに紅色を帶たるさまなるは珠玉開なり青みたる樣なるは碧玉開なり珠玉開は花に光ありてよし碧玉開は花に光澤なし。

四、花の重は五つ、葩より十五葩に至るを一重とす二十葩までを八重とす四十五葩より百葩までを千重とす百葩の外は萬重とし八重千重をよしとするなり。

五、實に形容大小高下赤白あり白に黄白あり銀白青白あり赤に湖赤木瓜色濃赤湖紫、濃紫、黑色あり形に瓶子あり實の首五ツに割七ツに割るゝあり白は銀色紅濃あり小瓶子をよしとす罌粟實、鈴實ともいふ。

六、蘂はすべて黄なり淡濃多少長短あり黄にして少きをよしとす。

七、葩は厚圓薄缺あり捻縮あり開くつぼむあり厚圓にしてつぼむをよしとす。

八、葉は大小、長短、頻弱、弱垂、圓尖あり其色紫碧淡濃あり細長にして强を兼たる色をよしとす。

九、木の强直なるあり卷曲なるありのびやかに細直なるあり即のびやかなるをよしとす。

花譜に云牡丹は尿を忌む油粕を撒もあしゝ尿を置ば必ず傷む但し尿を和したる久しき土を用ひ冬根まはりを少し堀て右の土を舊土にか

維新後數年前までは政府が主として産業の奬勵をなし或は改良の法案を示す爲めに各種の事業を興したと云ふとは澤山御座いまして之は私の申す迄もなく諸君の能く御承知あるとで御座いますが故に是等の事業は政府の義務であるかと心得た人もありし位で御座りました然るに近年に至りましては政府が干渉すべきものでないと斯う云ふ論者が大に勢力を得た樣で御座います此事の當否は固より此處に論ずる必要は御座いませんが凡そ産業の奬勵改良進歩を計ると云ふには之を促進するの手段方法がなくては叶はぬとは思ひます然らば政府は干渉すべきものでないとして顧みない民間有力の御方も斯る公益のあるとこに就いて一向御頓着ない譯でありましたならば我が園藝の改良進歩を計るとは何人の手に成りませうか斯の如き有樣で御座いましたならば益々蕪靡衰退するのみと考へます何れの日か振起すべきとが出來ませう實に嘆息の至へ其上にあら糠を置寒を防き來年二月暖氣になりたるときに糠を去べし或は云牡丹は甚だ濕地を忌少し地高く植べし尤尿尿をいむ肥たる黒土又黄沙土よし根虫あらば去べし園史に云牡丹冬の間根回りを堀めぐらし糞水をそゝげば花盛なり牡丹には小なる蟲虫多し卒爾に見えず能く見て採去べし是あればかじけて花少しといふ又牡丹の實を蒔には九月地上に牡丹の子を二ッ並べ置其上に土器を一ッ覆ふべし幾らもかやうにすべし來春白根いで芽生るとき土器を去べし十に八九は必ず生ず又云七月初の比をひ實の熟したる時に採り則ち直に蒔べし一粒づゝ並べて其上に大なる蛤の殼を覆ひをき二月の中比蛤の殼を去べし鮑殼もよし實を植るに其實を槌にて少し打てひゃかし植れば生じ易し又兩の端を砥石にて少しとぎ或は小刀にてすこし削りて水に久しく浸して後植れば生じ安し蒔場所は尤日影をよしとす蒔て後に其上に松葉或は藁をおほふべし秋蒔は來春生す春生せざれば秋生すよし春生せずとて捨べからず實生して其年は移すべからず來春より屢移植れば花咲く度々移さゞれば六七年にしてやう〳〵花咲くことを好まばまば〳〵移し植てよし又一法牡丹はたゞ尋常に實蒔するも其皮極て固きものなれば生立悪しき者なり其法は夏土用中に實を取て茶滓に土を混じたる苗床に一粒づゝ並て下種し其上に又茶滓を五分程もおほひ蛤貝を伏せ置翌年三月比に至て貝を除ば十中の八九は能く發芽するものなり又牡丹を植るには九月の中比よし暖なる年は九月の初にもよし凡牡丹根はやはらかなる土に植へし根土のかたからざるがよし或云五年に一度堀出し別の土に植べし然らざれば子生ぜず花の色香あしく根のかたまりたる舊土を去べし芍藥も同じ牡丹を堀とき小根を傷ふべからず根回りより遠くほり杭にて靜に堀べし凡牡丹は鐵を忌故根に鍬などの鐵器を觸れば悪し花を萬にも鐵刀を用ゆべからず冬は雪霜に傷まざる樣にすべし春蕾の附たるとき初より目利して十の内三四は花開かざるあり夫らを摘去べし殘れる花の精力を奪ずしてよし又或云牡丹は黒土あゞ土に植るによろし又黒土をあゞ土に雜たるもよし或は黒土二分砂一分まぜてよし溝中の肥たる黒泥を日々干かためて能く碎き細にして黒土にまぜて植るもよし赤土田土はあしゝ土を細かにしてかたまりたるは悪し植るには根際より一寸五分土をかふ根の土をかたくすべからず砂地又疲たる地には尿を置てもよろし或は根先の行所に冬は馬糞をおき正月末に去べし然らざれば蚯蚓生するか或は尿に水を加て根の土にそゝき又米泔汁を一兩度かけるもよし膠を多く煮て汁を根にかくる是牡丹の良肥なり牡丹の莖に虫の入たるをは其所

りで御座ります。

本日大隈伯爵閣下が園藝會の集會を此處に開かれましたるも蓋し同好の人を得て大に我が園藝の改良進歩を促すと云ふ御主意に外ならぬ譯と信じます併し或は今日官職にあり或は民間に在て業を執らるゝ方々は多忙にして寸隙もない到底大隈伯の眞似をするとは出來ぬと斯う御仰つるかも知れませんで御座いますが併し實際に於きましては決してさう云ふものでないと私は思ひます茲に能き御話が御座いますが嘗て私が伯の御一言を承つて今能く記臆して居ると御座います大隈伯爵が御仰つた言葉に職務が多忙なれば精神を勞すると云ふとの多いのは勿論である然らば之を養ふ手段がなくては行かない之を養ふには園藝に優るものはないと斯う云ふ御論で假令ひ又何程多忙だとて決して一日に一時間や二時間の精神を養ふべき時がないと云ふものではない然るに多忙にして園藝を嗜むの餘

暇がないと云ふ人があるが是れは大なる誤りであると申す御説で御座います不肖ながら私は御同感で御座いました此論は屢々私も是迄述べましたとが御座いましたが既に大隈伯爵の如き劇職に執掌なされた御方であつて此事を述べられまする以上は詰り出來ぬではなくして爲さぬのであると考へます。

故に私が諸君に望む所は劇職にある方々は先づ宜しく精神を養はるゝがよし又閑散の御方々は攝生を重せられまして ドーゾ公益のある餘澤を御始めにならんことを希望致します。

菊を見る事

古人菊を見るの法則を立つ其注意周到なる一事一物を等閑に看過せざる洵に感賞に餘りあり藏て地錦抄にあり左に其全文を擧ぐ。

○菊は總躰を十品に分て見るべし其十品といふは一位二形三色四重五首六葉七葩八葉九節十草なり。

○一に位といふに次第あり一位未レ見二三四位までをよしとす五位よりはふれたり但輪の大小によらず花形もよく自然なる位あるを上なりとす。

○二に形に大中小輪あり平花ありつぼみてうけ咲ありまくりて反かへるあり天むき下へうつむくあり八重一重によらず花形ゆつたりとして隱逸の風儀なるをよしとす。

○三に色は五色といへども外の色まで咲なすは菊の德なり白は咲出うすく色あり て後ほど潔白なるは花に艶ありてよし初に白くして後ほど色用は白といひ難し紅は咲出珠玉にして後ほどうすく本紅なるをよしとす濃は黑みて紫の方なり諸色ともに鮮なるをよしとす。

○四に重は一葩めくりより三羽めぐりでは一葩とす四葩めぐりより八重千重なり葉なきはふきつめなり。

○五に首は花首なり花くび細く強きあり太くたくましきあり猪首なるあり柾もを小刀にて削さり竹の釘を以て虫をさし殺すべし其跡はやかていへあふ者なり又莖の皮に白虫多く付ることあり其時は櫻椶の毛を結て箒とし掃さるべし牡丹蕾の多く付たるとき其中のかしけたるを去には蕾の上の方を半截さるべし蕾を全くきるべからず精氣のほらずして傷むべし園史に云牡丹芍藥の花を瓶に挿には先枝の截口を火に燒こかし其あとに臘をとろかしてぬりて水に挿べし數日經もあほまず。

花壇大全云牡丹の能く榮ふるは其家繁榮の兆なり双頭異花妖怪なるは不吉の兆なり凡牡丹の花壇は乾濕の地を考へて作るへし牡丹は寒によろしく熱を忌燥に宜く濕を忌なり根腐りて顚て枯ると知べし花壇の幅は牡丹の大小によりて定め難し中の木は間半許にしてよし小木は四尺ばかり花壇は二通も植るなり高さは地形より五寸許高くてよし併し水なとつく處には其心得あるへし緣石は幅廣きは惡し石の繼目には杭をさすべし覆の柱を石に立るも可なり又緣を木にてもすれとも栗を嫌ふといふ人もあるなり花壇土は舊土を去て新土を用ふへし黑ぼこ土すくも土畠土石三色を等分に合せて細かなる篩にて通し牡丹を植替る時分に馬の能く踏たる糞を干て灰に燒て石の土五分一程雜合せて植べし冬は牡丹の根の土凍ざるやうに馬屋糞又は馬屋を敷てよし春陽氣來らぬ前に取捨へし痩木を俄に成長せしめんとて肥料を強くすべからす雨水を取置て日を經て少し小便をまぜ合せて寒に入て根先へ少しつゝ澆くがよし總して有つかぬ木に肥を嫌ふ木を洗ふ事は落葉して後に雨の降時分に根の動かぬやうに柳の箆にて苔を落すへし洗ふて後山茶の實を碎て布に包て油の出るやうにして木をぬぐふへし常の油にてもよし水立うつくしく花なけれとも一入なかめとなるものなり但し度々洗ふも痛てあしく又洗はさるも不奇麗にて見苦し覆は油引たる障子は移りよく花も一入光ありて能く見ゆれど陽氣油氣を通して花いたむことあれば何の覆にても花に近き は惡し花に遠きは久敗花を保てよろしきなり牡丹冬至の前後に鎭乳石硫黃石二色を粉末となして根の回りを掘埋べし來春花盛に開くなり又植る時白斂の末を土にまぜてよし虫食ふことなし地の肥たる所には肥をゝくべからず油粕も惡し一枝に數花生ずるは小さき撰去て只一二花を留むべし花散て後順て其莖を剪去て實を結ばしむべからず老易きをゝそるればなり又牡丹の切花は夜陰か早朝になすべし但し雨風なき夜は庭に出して夜氣を受べし花の保ち强し牡丹を挿木にすることあり大方は根をゝろすもあり白牡丹の根に白求を培ひ用ふる時は其花半は金色に咲ものなり其名を金田又土車などゝいふなり但し白求は細末にして一度に百目ヅゝ五七度も根本にかくるなり

細長くして強きを上とす。
○六に蘂筒はしべは筒の如く丸し丁字しべといふは蘂種の丁子頭の如くなりやらうと云ふは花の内少しの間月額の如く黄色なり。
○七に葩に厚薄あり切まはしよく中くぼなるあり中高くして反かへるあり捻けたるありよれたるあり細長きあり短くつまりたるあり筒咲といふは元より末まで袋にして竹の筒の如くなり矢車咲は元は筒にて花咲竹を切そぎたる如く矢筈なり何れも花形に見合て相應なるをよしとす。
○八に葉に大小圓長あり切込深きあり淺きあり厚薄ありうすく青きあり濃黑みたるあり葉の莖より矢筈の如くなる物出るもあり切込ありて薄青くすこやかなるをよしとす。
○九に節は花開時節なり勝れて早咲なるは珍賞すれども友に先立類なき故淋しく遲開は花の名殘として賞せしかとも霜風に當りてむつかし吟中ぐらいなるさかり及黄猿といふ物を紙に染てぬれながら白牡丹の蕾を包むこと一日に兩度づゝ花の開くまでかくする時は其花黄色に開くなり牡丹の花盛は大方立春より九十日なり然れども下品の花は十日餘も早く咲ことあり又一國の内にても少しの遲速はあるものなり京師も洛中と洛外は二日の遲ひあり奈良は五日遲く伊勢尾張は八十八夜の比大方盛なり駿河は六七日も早く加賀越前などは五七日も遲し摂津播磨は氣候同じ京よりは二日早く筑前筑後は五日早きなり。

牽牛花培養法土地の辨の事

牽牛花を植るには第一土地の肥瘠を見るべし肥たる土は格別のことなれ共瘠たる土は隨分肥を度々すべしされど地性の牽牛花に合と合ぬとあり東京にて言ば下谷淺草を上とす本所是に次荒木田土はまゝ過るし扱土はごみ溜の志たの腐れ土をふるひて用ゆ山の手の土或は黑ぼこの肥たるには河砂を三ヶ一割でよし又河砂斗りへ少し土をまぜて植ることもあり斑入者にはよけれども其外は蔓やせて葉の光澤なく賞翫うすし。故このまゝ山の手の土は肥過て莖生さかんに葉太り過て花少さく色もさへぬ者なり莖生よければ花咲こと自然に遲く實のり難し市中又は燒土にて地性悪く芥の流込ある堀の揚土をよく〳〵干て肥をすべし揚土はごみ溜の志たの腐れ土をふるひて用ゆ山の手の土或は黑ぼこの肥たるには河砂を三ヶ一割でよし又河砂斗りへ少し土をまぜて植ることもあり斑入者にはよけれども其外は蔓やせて葉の光澤なく

を良とす。
○十に莖立に長くのび立あり短くたくましきありつまりて太く枝數多く出るあり背中位にして健なるを良とす。
菊は土地によらず第一に手入なるべし花花の指渡し曲尺一寸より以下は小輪とす小輪に二品あり五六分以下は小の小とす一寸より二寸迄は中輪二寸より三寸迄は大輪なり三寸二分より三寸五分まで其上は大の大といふべきなり。
古今統云菊夏の間に分栽太た密なるに宜しかちず密なるときは則ち花の頭小し黄白二種を栽るに宜し藥に入るべからす秋の後花を開く者最も佳し家庭の中に之を栽て甚だ逸趣あり且吉祥を兆す其晩節に霜を後くの操を以て群花の得て而て班るべき者に非ざるなり凡菊を種るに六要あり○第一陽に向て氷雪を遮り護り冬其根を養へば春苗乃ち苗づ○第二其畦を高くし其溝を寛かにし年毎に其地を易て新土を加へて舊土を去べし○第三其苗を土の製造やうは朝顔を植んと思ふ場所をあらかじめ耕耘して積おき寒中に肥を澤山にかけ能々凍させ切返しおき春に至り氷の解初る比に幾度も切返し篩にて細にふるひ土のきまらぬやうになして植るべし。

同植土製造法の事

種は三月春分の比より五月夏至の比まで何日にても勝手に蒔べし就中三月穀雨の節を吉とすたとへ世間より早く蒔たりとも時節來らざれば花咲ず漸く十日も早し若早く花を咲せんと思はゝ二月彼岸の比に種を下し少し芽ぐみたらば毎夜霜除をなし隨分寒にまけぬやうに仕中葉二三枚も出たれば根を掘植かゆる左すれば花は早く咲ともいちけ咲にてうるわしからず何れ八十八夜前は苗いたみ易き故大切の種はなるたけ遲く蒔べし四月中旬に蒔は育早し地へ蒔ば土龍及根切虫の愁あり大切の種は鉢へ蒔がよし鉢の渡り五寸位は四五粒蒔を限りとす偖種は芽の方を下にして伏せべし仰むけて蒔ば地の上へ根出て大方は腐るものなり同種にても生に遲速ありたとへば五粒蒔て五七日も立て一根を生じ夫より二三十日も過て追々生ずることあり生ぬとて掘かへすべからず花葉替りて生ずる者は生る事なほ更おそし

治るに小竹を用ひ其傍に扞立て葦を以て寛く之を縛れば其莖曲らず○第四乾る土を久雨に培ひ其根を爛すとを防ぐ○第六朝五傍の枝を削り以て正幹を植る○第六朝毎に清水を灌ぎ其根を沃て後に肥を用ひて澆ぎ培ひ以て本を厚くす又黄白の二菊の(其半幹を去て而して之を合せは即ち各黄白相半すと云々又春分種る時蕾根を去り鍼根を栽べしと。

花壇大全に菊を植るに六つの品あることを擧たり下の如し。

○一には貯レ土は肥たる土を撰て冬至の後肥をかけて凍て乾を待其土を軟げて塲地に置き再び肥をかけ乾て後室中に納め置二月の中より後取出し日に曝し土を清くして貯おき菊を植て後三日以上の雨にあひ土堅く根あらはれは此土を以て根を覆ふべし如レ此すれば旱を防ぐ雨の潤を納て其根を腐ざらしむ。

○二には種留冬の初に菊の莖を切去其莖を五六寸留置極月に至て澆肥を灌ぐこと數斯の如くすれば媛にして氷らず以て菊の本を壯にし以て寒を防ぎ以て潤澤にして枯燥に至らざらしむ。

○三には分レ秧春分の後菊秧を分るとき根に髭多くして土中の莖黄白なるを用ひず新にすきたる鬆地に植べし晴天に分つ可からず根髭少くして白色なるを用ひず新にすきたる鬆地に植べし晴天に分つ可からず根乾て活がたし植る地は其宿土を悉く取去されば虫の害あり植て後漑にて日覆をすべし朝夕水を掛て苗出なば日覆を去べし後に肥料を施すべし。

○四には登レ盆立夏の時分苗五六寸許なる時盆に登すべし其前數日水を灌ぐべから即ち苗堅老して盆に在て日に耐べし根土を廣大に掘べし極月前に拵へたる肥土を培ふべし陰晴を見て水を灌ぐに加減あり葉生じて後肥水を灌ぎ久雨には臘土を以て潤すべし植樺浸ければ日に傷み深ければ水に傷む凡菊の根あらはれば氣を付て培ふべし。

○五には理紐菊一尺許なる時長ぜしめ代を作るには土を能々ふるひ壷一枚位に高サ五寸程に作るべし一と色時の時は格別のこと色數あまた時は夫々へ花銘の札を付てまるしとし竹にても木にても動ぬやうに仕切をすべし代へはうつすりと肥をかけ四五日おきて種を下し厚サ二三分位に土をふるひ掛るかよし種は隨分まはらに時べし時たる夜と翌日雨の降を忌故天氣を見定て時べし日和つゝき土かはかば如漏にて水を灌ぐべし若や水多ければ種くされ水乾けば芽きれおそしと知るべし。

苗分の法并に鉢植の事

貝割より中の葉二三枚も出たらば日和のよき晩景に苗分をすべし一本〳〵に分へ植畑へさくを立て植る夫より三四日の間は日除をすべし七日も立て根付たる時一通り肥をかけ花出てより其善悪を見て鉢へなり勝手に植る左すれは幾度植かゆるとも枯るゝことなし雨天に必苗を分べからず日和になれば枯るゝ者なり初より鉢へ時たるはよきを一二本殘し餘はうろぬきて外へ植る貝割の葉落ずして賞翫あつし又苗分の時かたく土を煉て苗を二三本づゝ寄て握り根を圓子のやうにして畑へ移し花は早く咲とも蔓疲て盛も永からず此法は雜花など澤山に作るにはよろしけれど上品の花には爲すべきことにはあらざるなり。

植べき鉢の事

鉢は渡り六七寸已上を吉とす東京にては今戸燒を普通に用ゆ水の抜よきやうに底の穴を大きく明け土留の貝もすく樣にすへし五寸已下の鉢は藥のかゝらぬが殊更によし鉢の肌へ根くひ付て水抜もよく朝顔の育ち方一層によし。

手當の法の事

植る塲所或は鉢植をおく所は朝日を除き翌よりして晩景まで日當よく風のすくがよし夕日あたれば花も豐かに咲て色の出もよし植付て根付たるとき肥をすへし夫より花葉の樣子によりて一ど月に一度つゝも肥をすべし花の咲とき肥をすれば其二三日は花も已前より不出來になれども夫より段々太るあまり肥をすゞせば却て枯るなり心を注べし蔓ふとりすぎ葉大きくならば蔓を留葉もつまみ水を控へ土を乾めにしておくべし紅又瑠璃の類は土乾けば色の出一層によし斑入もの黄葉の類は强き日にあつへからす青み强くなり枯葉出來て見苦し總て日中に葉の凋れたる時二度つゝも水を灌ぐべし鉢を取替手を替るには前日より水を引土を乾かして凋れたるとき夕方に植替れば根付よし手を替蔓をからみ直すに傷まずつるのふり替りて花葉など下を向は水を葉の上より一面に掛れば一夜に上の方を向なり地所

んと思はゞ其旁枝を去べし短がらしめんとならば其正枝を去べし花の枝は其大小を見て殘すべし大なるは四五葉次は七八又其次は十餘小なるは甘餘葉甘菊寒菊の類は獨梗に千花あり去べからず。

○六には證養菊漸々長ずる時竹を立て結付け守り風に搖ざらしむ菊の傍に蟻多くは鑑の甲を彷にやけば蟻は必ず其甲の集るを取去べし夏至の前後菊虎とて黑色なる虫晴暖なる時飛出て苗を傷ふ出る時を待て除くべし秋後に又虫生ず多く茂り易き雜菊をまゝりに植べし凡菊は香ある故に蟻の上りて糞をする時は虫を生ず其虫長じて蟻又是を食へば菊長じがたし其虫虱の如し樓櫚等にて掃落すべし。

菊花栽培の事

凡草木俱に土地に相應せざれば繁茂せず應ずる時は地氣盛なる故に藥種はきゝめよく食物は味ひよし東都にては巢鴨染井の邊は菊を造るに妙なる故に古くより名なき人は鉢植にして物干の上などに置ても夜露さへうくればよし地氣なき所は日中には心を付度々水をかくべしされど一向地氣をたてば勢あしき故折ふしは夜分土間へおけば猶よし苗の中は如漏にて水をかくべし。

花を大輪に作る法の事

總じて大輪の花は造り易く小葉の小輪はかたし花に大中小の品あれば勢なき人は鉢植にして物干の上などに置ても夜露さへうくればよし地氣なき所は日中には心を付度々水をかくべしされど一向地氣をたてばなる丈大きく咲べき種を撰み偖日向のよき場所を深サ一尺程に掘て魚の腸を埋め土を均し間三四尺づゝ置て手にすべき竹を立其脇へ種を四五粒づゝ伏せ貝割の肥て勢よきを一二本づゝ殘し疲たるは扳捨夫より中葉出る前に一通り肥をかけ少しづゝ土を切掛け蔓五尺位延たる時梢を留枝をふけば三枚づゝ殘して梢をつまむ夫より枝の出る度々二葉三葉づゝ殘して梢をつまみ去蔓斗のやうにすべし折ふし肥をすれば必大輪に咲物なり凡大輪に咲べき種は色々あれども珍花は大輪に咲ず大輪には上花なしされば大輪は奇とするに足らず朝貌を作る道巧者に至らずとも右の法方により仕立れば必ず大輪に咲ものなりと知るべきなり。

種を收へき法の事

種をとるには凡て本末を分つべし本とは根の方に近く初咲の中に實物の聞えあり故に草木の養方に精密者世に普く知る所なり素菊は根分をよしとす親木の種を失はず然れども親木の古株より虫を生ずる事多ければ實生を養ふには如す實を蒔には培養を第一とす山の野土の肥たるか黑ぼく赤土青土の類濕りなき土をよしとす菊は濕地を忌ものなり地所高く日當よき所に代と云て蒔べき床を補理肥地を入るゝなり土拵は野土黑ぼくともに是まで菊を植ざる土を用ゆべし砂眞土を地綿抄に合肥と號る法は野土一斗眞土一斗赤土一斗三色を雜これに人糞一斗を以て煉合藁の灰又は糖を炒て切雜寒中より雨のかゝらぬ樣にして五十日程いてさせ貯へ置なり九月下肥を二度ほども切交るなり二月の節に至り是を犂て土篩にて細かにふるひ日に曝し代の土と入替て種を蒔其上に藁を至て細に切し座を少し掛雨覆をして置苗生てより雨覆を取日に當如露にて水を少しづゝ澆ぎ掛ぶを云其種は花の出來あしく中比に至り花の盛の時の種は花形も正敗親木の通に出來るよし末に至れば花葉も穢々に替る故其種を蒔は親木と替るものなり本種はあしと雖も麁末すべからず本の方實のりて上の方はふつと實のつかぬことあり何れの所にても花替りて咲又葉替りて出る所あらば夫へ印を付て種をとれば替りもの出ることあり絞の花の種は絞の一面にある所を收べし半月絞なく而白く絞たりとも其種は紺の白の方によりたる種は白と苗を刈々になるものなり源平其外變化せし者の類一輪づゝ替りて咲は其所々の種にてのなり源平と色づゝ刈々になる一本にて花も色々に咲葉も穢々に出るは其年一と色づの出來もの故求めて出來がたき者なれども其性を引故其種を澤山に蒔ば其中より出ることあり實のりかぬるは蔓の梢をとめ肥を控へ土を乾きめにすべし種の青き中收れば花葉替るといふは大なる僻說なり實のいらぬ種なにかせんと生じたりとも花必あしく其儘蔓に置てよく乾きたるには如ず種をとりてよりあまり日に干かしては蒔てより芽出しをそし此花は某の花より變じ此葉は某の葉より變じ出ると皆それ〳〵に筋のある者なれば石花鳳皇葉眉尺糸柳渦川其外種々變化の者小葉の類は親木なければ出來がたきものと知るべし。

るなり。

菊根分の事

菊の根分は九月十月ころ親株の根元より出たる芽を分取り別に肥し土に植置て霞を低く掛て霜除をなして養ひおき春晴の比花壇に肥土を入替五六寸つゝ隔て穴を掘烏尿と烟草の煮を細に切雜て是を穴一ツ宛へ入菊を一本づゝ植るなり苗の實生を植るも同じ事なり六七月ころ肥を根本へ入べし　肥を多く澆げばかせて葉枯るゝ事あり菊譜にも花は養ひ易く葉は養ひ難しと見えたり　尤肥を葉に着べからず泥付たらば清水にて洗ふべし又云韮の汁を以て根に澆ぐべしといへり蕾根は遠く去るべし虫を生して害をなす夏菊は八月根を分植てよし寒菊の類も皆秋根分をするをよしとす。

菊の苗の虫を防く事

菊の苗育てより五六月より穂の軟なる處を虫の嚙切て穂を失ふことあり菊虎という形蛬に似て細長し菊芟の古根より生ず故に古根を植べからず又根切虫付て苗の軟弱なる節根もとより嚙切るものなり蛀といふも秋菊の幹より生じて俄に枯す虫なり菊虎の吸たる所に卵を産付おく虫なり蟷螂木蝨害をなすなり蚯蚓地虫菊の根を傷しむるときは石灰の水を以て元に灌げば自ら死す　速に河水を以て連澆すれば灰毒を解す幹に黑蛐の如き物付幹の瘠るは麻を筋頭を包これを求る時は虫出る象幹虫の如し葉を食ふ早く起て針を以て其穴を尋ぬ則殺すべし毎朝米明に紙燭を照して幹虫菊虎を探ること怠るべからず鼠は海參を忌ものなり。

菊を採で形容を作る事

菊の苗五六月ころ迄は穂を切てよし枝に芽を吹せ一ッ枝に莟一つ宛付皆摘とり竹或は葭を添て扶となし琉球席のほつしにて結付自在に枝振を付るなり這せんと思はば莖を地へ曲て竹にて止れば根を生じ何れの花咲苗によらず貝割より中葉二三枚は孔雀のやうに丸く出ることあり又孔雀も中葉三四枚出てより一二枚のうちは傍に角のある葉出ることあれどもあとの葉は持前にもどるなり替り花替り葉といふはあり來りの花葉と替り出るをいふ花替り葉替りといふは一本に花葉色々に替りて出るをいふ葉替りは盛の時に至りて樣々の葉の出るをいふ花も末に至りて無地も絞りになり形も色々に變化すれども花替りにあらざる故末に至るときは能々心をつけて見分くべし貝割の二葉一ッになりたるは必莖の脇の方綻て柳葉のやうに細き葉出るものなれども柳にあらず三四枚位より持前の葉出る一躰さし木にも接木にもなる者なれども一枝づゝ咲分の花は能々心を付て見るべし呼接になしたる者なれば枝の分れ目自然とぶどうに見ゆるさし芽は葉の替りたる所の枝を能ほどに切てさし日影にて根付たるものなりさる故に根もとを見れども貝割の形なし地際の葉自ら末枝の形あるものなり二度咲三度咲といふは常の通に咲て其花の中より蕾出て又咲をいふ是は何の形の花にありと定りたることなく風と出來る者故此種は必ず一度咲になると極りたることなし其年ぎりの變りものなり二度咲には親木なし。

肥料の製造の法の事

肥料は下肥を寒中より貯へ其中へ魚の腸豆腐の粕干鰛田作り油の粕なにゝよらず有合次第に追々に打込ておきよく腐れたるとき上水を汲かけてよしあまり濃ときは米泔汁を割て吉寒中のたくわへなくば干鰛を粉にして水にゆるめかけてよし惡臭なく上品なり又豆腐かすを腐らし小便へまぜてよし又魚の腸を腐らしても又下水のうす泥をかけてもよし茬がすは一端肥て葉もくろ〳〵となれども熱して葉に虫を生じ花葉を傷ふ故餘り好ぬものなり。

鉢植に手を取の事

手を取に別に法とてはなく形狀等各自の好に任ずべし併し其材は磨きたる葭を圓形に作り五六本立三段結ひを格好良とす最初は成べく下の方へ繩はすべし動もすれば上勝になりて見苦しければ其邊をよく心得べし。

灌水の事

灌水は年の晴雨によると雖も早には朝夕日午とも怠るべからず太陽に曝して焦が如く葉の凋んとすれば仲過る者を除くの外何か度なりとも全躰に潤て可なり炎天の比は隨分難義なる仕事と雖もこれ朝顏

てよく付ものなり。

菊の扦木の事

洋菊中菊とも當の少し見えたる時切て扦は根を生ず八月上旬をよしとす早く扦ときは根は多く生ずれども花小さしと云一説には大菊は四五月ころ雨天の節勢ひよき幹を管に切肥土に扦根を生じて人糞を澆げは甚よく肥て花大きく咲と云り小菊は自在に扦て根を生ずるなり。

菊接穂の事

菊は扦木にしても前にいひたる如く能活ものなれば根分して幹の堅なりたるを四五月比そぎ接にしてよく親木へ麻にて巻おき活たる比根を切べし腰條なう始接べき所へ疵を付土を煉て巻藁にて包おけば根を生じて親木へ付ものなり。

雨除障子製造の事

凡日覆ひ雨除とも障子は油を引はあしき者なり黄漿ひきにすべし黄漿は水一升に阿膠五匁明礬四匁の割合にてよし大方障子一本にどうさ一升五合ほどの見積にして一度ひき能乾して後また二度三度とひけば油をひきたる程に保つべきなり。

菊の花受を拵ゆる事

花受は程むら紙か極厚き西の内を丸く切るなり花五寸に咲んと思はば五寸五分の差渡しにすべし花の大小に准ずべきなり丸き紙の眞中に莖を通ずべき程に穴を明一方より其穴まで切こみ蕾を通して糊にて合せ付るなり菊の扶にせし竹にても葭にても當より二寸も下にて切針金にて受を拵へ其竹の切口へさして紙を受さするやうに拵るなり。

菊の種を取事

菊花盛りすぎて日々に衰へ凋んどする時に至りては日覆障子もとり夜氣を受さすべし葉を切取てより花びらも切眞中の眞ばかり殘すなり是を菊の月代といふ月代黄なる所なき檗になりたらば葉より五寸程下にて切紙の袋を拵へ菊の銘を書て入

栽培の要目たり鉢を替へ手を換る時は前日より控へめになし土乾きて葉の勢力うすき夕方に取扱へば痛むことなし手を替へ蔓をからみ直して不行儀ならば葉の上より如露にて水を灌ぐべし一夜に上を向て元の如くになる又來客等ありて一層美事に見せんとを欲せば前日の夕より鉢の央を盥に浸しおくべしかくの如くすれば花も何程か大きく葉の光澤も増べし此法よきとても餘り度々なすべからず却てこれか爲に害をなすことあり。

菊の説并に栽培の事

凡百花の中にても菊花は延齢の草にて色香かたちも勝れて最も芽出度ものにして自然に德を備へ神農も之を上品とし康風自ら神仙となり東籬に採て眞意を辨へ前栽を詠しては根の枯ぬことを知る實いへり類聚國史に桓武天皇の菊の御製を載られしは菊の歌の古き物に見えたる始なるべし左れとも古昔は愛する者の疎かりしか萬葉集には菊の歌一首もなし故に古今集には此菊の歌を多く撰載られしと土肥實平の春湊涙話に見えたり殊に朝廷に於ては重陽に菊花の御宴を群臣に賜ふ事は公事根元に詳させられ諸民尊敬する所なりされは往昔より菊を培養する者絶るとなし中古寳永年中より世に流行はじめ引續き正德享保を經て寳暦年中には甚だ盛を極めしと菊花は其流行三度變ぜり古は正菊を愛せしか寳永中より盛に大菊を持囃し享保中には小菊流行し寳暦に至りて又正菊起り此時は尺餘の菊花も出來しと菊經に見ゆ又近年に至り禁闕の雲深き御園生はいふも更なり地下の好者も多くなりて彼我負じ劣らじと奇品珍種を出し今は其數一千にも近きに及べりとす范石大か菊譜に或菊は奚をか先にすと曰く色と香を先にす而して後に態なり然れば則ち色は何をか先にす曰く黄なる者は中の色土は季月に王して而て菊は九月を以て花咲金土の相應して而て相得る者なり其次は白に若は莫し西方金氣の應なり菊は秋を以て開く則ち氣に於て鍾ると爲す陳藏器云ふ白菊は平澤に生す花紫なる者は白の變り紅なる者は紫の變り是紫は白の次なる所以にして紅は紫の次たる所以なり以上にいへるが如く菊は元黄菊白菊が本色にて他色はみな間色なる由人口に膾炙せる嵐雪か發句に黄菊白菊其外の色はなくもかな是を晋其角は深く感して我生涯菊の句是に及ばずと夫より菊の句を乞ふ者あればせを翁の白菊の句と此句より外は認めざりしと

置べし菊十種あらば袋も十ヲにすべし種を特折にも銘を書たる小さき板にても竹の筒にても記しに立おくべし偖種にすべき藥を取たらば軒下など雨の掛らぬ所に釣し置て貯ふべきなり。

菊花壇仕舞樣の事

花壇の仕舞やうとて別儀あるにもあらねども近來は實生を多くさする故種を取には遲く仕舞がよきなり花凋て後種を取べき花を見分一尺又は五寸位に切軒下などに繩を引て切たる菊の莖を繩に挾みて干乾すもあり種の取方は前に出せり元株の親木花壇より他へ移し植るとも夫々に札を付置べきなり實生は樣々に變化していまだ名の付ぬ菊も出來る者なれば種類を分て札を付置ざれば翌年は必ず忘るゝこと多し花壇簿に其順を記し置もよきなり。（完）

日用百科全書　第八編　住居と園藝

園藝　終

和名鈔　加波良與茂木　又加波良於波岐
一名　まさり草　百夜草　星見草　形見草　よはひ草
千代見草　ちぎり草　かたしよもぎ　こがね草　秋の花
おきな草　からよもぎ　秋しくの花　やまれ草　長月花
いなこ草　草のあるじ　花の弟　あきしべの花　あきな草
のこり草　たてり草　たきもの草　あつかひ草
漢名　黃華　治菊　周盈　節花　女節　女花　女蕊　日精
更生　金蕊　陰成　傳延年　喜客　禽華　帝女花　鞫客
延齡客　佳友　冷香　錦玲瓏　金玲瓏　粉玲　笑脇金
長生白　久視白　金剛不壞王　金花　晚節香　霜下傑
重陽花　君子花　隱逸花　拒霜　東籬客　金翹　黃鈿
配妃　黃華先生
甘菊（此菊は藥用に供ずる者）一名　金英　家菊　重英　凉蒿菜　石決
朱嬴　傳公　九華　長生草　貞芳
（完）

住居と園藝の廣告に依り御注文の節は其旨御書添を乞ふ

日用百科全書　毎月一回二十日發兌

定價		
一冊（二百五十頁）	金二拾錢	郵稅一冊
六冊前	金一圓拾錢	
十二冊前	金貳圓拾五錢	六錢

注意　◎本書ハ前金領收ニアラザレバ送本セズ◎前金相切レ候節ハ直ニ送本ヲ止ム◎郵券代用ナルトキハ（五厘券壹錢券ニ限ル）壹割増戻◎御注文ノ際ハ宿所姓名ハ楷書ニ記載

廣告掲載料　一行　金拾貳錢　一〇五號活字廿四字詰　一〇四號活字十八字詰　一〇二號活字十字詰　一行　金拾六錢　一行　金貳拾四錢

備考　◎本誌ハ一頁ヲ二段トス一段ノ行數ハ五號字三十二行◎四號字廿四行◎二號字十六行詰ナリ　◎原稿ハ切毎發行十日間前ノ

版權所有

明治廿八年五月七日內務省許可
明治廿九年一月五日印刷發行

編輯者　大橋又太郎
發行者　大橋新太郎　東京市日本橋區本町三丁目八番地
印刷者　愛敬利世　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

東京市日本橋區本町三丁目
發兌元　博文館

日用百科全書　第九編
博文館編輯局編纂
勤學と處世
全壹冊洋裝　正價金貳拾錢　郵稅六錢
二百八十頁
卷首：諸大家題序◎彩色木版畫並に寫眞銅版畫數葉入
（一月廿五日發兌）

學問は難し、去れど學校を出でゝ學びたる所を實地に用ひ、一身を世に立てゝ社會の風波を凌ぎ進むこと最も難し、本書は勤學と處世の方法捷徑を、最も適切に、最も平易に敍したるもの、世の青年男女及び子弟を有する父母兄姉の方々、之れを一讀し玉はゝ、補益少なからざるべし。

置べし。菊十種あらば袋も十ヲにすべし。種を特折にも銘を書たる小さき板にても竹の筒にても記しに立おくべし。偖種にすべき葉を取たらば軒下など雨の掛らぬ所に釣し置て貯ふべきなり。

菊花壇仕舞樣の事

花壇の仕舞やうとて別儀あるにもあらねども近來は實生を多くさする故種を取には遲く仕舞がよきなり。花凋て後種を取べき花を見分一尺又は五寸位に切軒下などに細を引て切たる菊の莖を細に挾みて干乾すもあり。種の取方は前に出せり。元株の親木花壇より他へ移るとも夫々に札を付置べきなり。實生は樣々に變化していまだ名の付ぬ菊も出來る者なれば種類を分て札を付置ざれば翌年は必ず忘るゝことと多し。花壇簿に其順を記し置もよきなり。（完）

第八編　住居と園藝　終

日用百科全書

いふ。

○菊

和名鈔　加波良與茂木　又加波良於波岐
一名　まさり草　百夜草　星見草　形見草　よはひ草
千代見草　ちぎり草　かたしよもぎ　こがね草　秋の花
おきな草　からよもぎ　秋しくの花　やまれ草　長月花
いなこ草　草のあるじ　花の弟　あきしべの花　あきな草
のこり草　たてり草　たきもの草　あつかひ草
漢名　黃華　治蓄　周盈　節花　女節　女花　女蕊　日精
更生　金蕊　陰成　傳延年　喜客　禽華　帝女花　壽客
延齡客　佳友　冷香　錦玲瓏　金玲瓏　粉玲　笑臨金
長生白　久視白　金剛不壞王　金花　晚節香　霜下傑
重陽花　君子花　隱逸花　拒霜　東籬客　金翅　黃釧
配妃　黃華先生
甘菊　此菊は藥用に供する者　一名　金英　家菊　重英　涼菊　石決
朱嬴　傳公　九華　長生草　貞芳　（完）

住居と園藝の廣告に依り御注文の節は其旨御書添を乞ふ

日用百科全書　毎月一回二十日發兌

定價
一冊（二百五十頁）金二拾錢　郵稅一冊
六冊　前金一圓拾錢
十二冊　前金貳圓拾五錢　郵稅六錢

注意
本書ハ前金領收ニアラザレバ送本セズ
前金相切レ候節ハ直ニ送本ヲ止ム
郵券代用ナルトキハ（五厘券壹錢券ニ限ル）壹割增ノ
御注文ノ際ハ宿所姓名ハ楷書ニ記載

廣告掲載料
五號活字廿四字詰　一行　金拾貳錢
四號活字十八字詰　一行　金拾六錢
二號活字十字詰　一行　金貳拾四錢

備考
本誌ハ一頁ヲ二段トス一段ノ行數ハ五號字三十二行四號字廿四行二號字十六行詰ナリ
原稿ハ切每發行十日間前ノ

版權所有

明治廿八年五月七日內務省許可
明治廿九年一月五日印刷發行

編輯者　大橋又太郎
發行者　大橋新太郎　東京市日本橋區本町三丁目八番地
印刷者　愛敬利世　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷所　鱒秀舍　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

發兌元　博文館　東京市日本橋區本町三丁目

日用百科全書　第九編

博文館編輯局編纂

勤學と處世

全壹冊洋裝　正價金貳拾錢　郵稅六錢
二百八十頁
卷首：諸大家題序　彩色木版畫並に寫眞銅版畫數葉入
（一月廿五日發兌）

學問は難し、去れど學校を出でゝ學びたる所を實地に用ひ、一身を世に立てゝ社會の風波を凌ぎ進むこと最も難し、本書は勤學と處世の方法捷徑を、最も適切に、最も平易に敍したるもの、世の青年男女及び子弟を有する父母兄姉の方々、之れを一讀し玉はゝ、補益少なからざるべし。

博文館發行四大

太陽

第貳卷 第壹號 一月五日發行

寫眞銅版口繪 ◎近衛師團長野津道貫君肖像 ◎可美眞手命立像（芝離宮藏）◎伊藤侯の一家 ◎福澤諭吉君 ◎小幡篤次郎君 ◎慶應義塾 ◎科學五大家 ◎富士山頂測候所及野中理學士並夫人肖像 ◎臺灣風土 ◎北海道冬景 ◎支那風俗 ◎獨逸風景 ◎哲 ◎歐洲美人 ◎墨國劇界の二英 ◎農商務省と東京府廳

社會の萬般を照徹し、新日本の輝光を宇内に發揚すると同時に、海外の新智識を養て、以て國運の進長に補するもの、それ唯太陽あるのみ、東より、西より、南より、北より、皆な來つて太陽を讀め。

毎月二十日發行 正價 ◎壹冊金拾五錢 ◎六冊前金八拾五錢 ◎拾二冊前金壹圓六拾五錢 ◎貳拾四冊前金參圓二拾錢 ◎郵稅壹冊に付三錢づゝ

少年世界

第貳卷 第壹號 一月一日發行

寫眞銅版口繪（文壇三名士 坪内雄藏君 森鷗外君 林太郎君 文藏君 肖像）（年長的と貴族的）：武内桂舟 ◎大和畝傍山及橿原神社 ◎東久世伯爵の題歌

將來の國民の最良師友として、絶好家庭として、年少子女の必ず玩讀せざるべからざるものは少年世界なり、本誌は實に飽に和して藥を勸め、名教を樂土の中に寫するものなり。

毎月十五日發行 正價 ◎壹冊金五錢 ◎六冊前金三拾錢 ◎拾二冊前金五拾七錢 ◎貳拾四冊前金壹圓拾錢 ◎郵稅壹冊に付一錢づゝ

雜誌改良增刊廣告

少年文集

第貳卷 第壹號 一月十日發行

寫眞銅版口繪 ◎文學博士川田剛先生 ◎學士會員木村正辭先生 ◎文學博士黑川眞頼先生 ◎鎌倉八幡宮 ◎大塔宮神社 ◎大塔宮土牢 ◎源頼朝公像 ◎日光神殿 ◎相州小田原 ◎上野黑門の雪景 ◎長崎阿蘭陀橋 ◎奈良春日の鹿

文は貫道の器なり、學界の花なり、意を達し、交を通し、懷を遣り、感を記し、事を叙し、物を賦する、必らず之に依らずんば能はず、而して少年子弟をして文學を咀嚼研鑽せしむるものを、少年文集とす。

毎月十日發行 正價 ◎壹冊金拾錢 ◎三冊前金五拾錢 ◎六冊前金壹圓拾錢 ◎郵稅壹冊に付金壹錢五厘ッゝ

文藝倶樂部

第貳卷 第壹編 一月十日發行

◎木版極彩色畫……武内桂舟筆 ◎寫眞銅版畫 ◎歌舞伎座 ◎明治座 ◎市村座 ◎新富座 ◎團十郎 ◎壽子 ◎富貴子 ◎猿五郎 ◎左團次 ◎九蔵 ◎福助 ◎米蔵 ◎ほんたお染の道羽子 ◎美人鳥道 ◎遊獵 ◎京風山雪子貴景 ◎瀧車 ◎京雀女の庭園散歩

抒情詩あり、叙事詩あり、悲劇あれば喜劇あり、明治文壇に現はるゝ所のあらゆる小説、戯作、詩文を網羅して、一は以て昭代奎運の盛を鳴らし、一は以て消閑排悶の清娯に供するものは、則ち本誌文藝倶樂部なり。

毎月十日發行 正價 ◎壹冊金拾五錢 ◎六冊前金八拾五錢 ◎拾二冊前金壹圓六拾五錢 ◎郵稅壹冊に付二錢五厘宛 毎年四回の臨時增刊を為す

日用百科全書

日用百科全書は、人生欠く可からざる家庭内外の必備なる、平易なる文章と鮮麗なる繪畫とに由て、詳細親切に說明し、冠婚喪祭の禮法より、衣食住、衛生、看病、育兒、音樂、手藝、園藝、交通、旅行、商業、經濟に至るまで、總て本邦の生活に適實なるものゝみを網羅し、優美高尚なる冊子として逐次出版さんとす。讀者坐ながらにして幾多專門の師に就き、一々口授指南を受くるの益あらん、若し之に由て春風の如く、秋月の如く、清潔にして簡儉、健全にして和樂なる家庭を得ば、帝國の品位更に高きこと一等なる可し。

(◎本書第拾參編以下の目次は逐て廣告す可し)

毎月一回廿日發兌
美裝紙數一冊菊版二百五十餘頁
◎正價一冊金壹拾錢◎六冊前金壹圓拾錢◎拾貳冊前金貳圓拾五錢◎郵稅一冊ニ付六錢宛

本書目次

- ◎第壹編 六版 和洋禮式 全
- ◎第貳編 五版 茶の湯と生花 全
- ◎第參編 四版 實用料理法 全
- ◎第四編 三版 家政案內 全
- ◎第五編 二版 琴曲獨稽古 全
- ◎第六編 衣服と流行 全
- ◎第七編 裁縫と編物 全
- ◎第八編 住居と園藝 全
- ◎第九編 勤學と處世 全
- ◎第拾編 育兒と衛生 全
- ◎第拾壹編 通俗書簡文 全
- ◎第拾貳編 旅行案內 全

和洋禮式

閑院宮妃智慧子殿下題辭
從一位近衛忠熙公題詠
從三位侯爵前田利嗣公題辭
前田侯爵夫人朗子君題詠
〔六版 出來〕

全壹冊美裝　正價金貳拾錢　郵稅八錢

極彩色口繪：水野年方◎表紙密畫：鈴木華村◎寫眞銅版畫：伊勢大廟：出雲大社：閑院宮載仁親王殿下：同宮妃智慧子殿下：華族女學校：高等女子師範學校：高等女學校：東京女子職業學校

人生交際の道、禮を以て第一とす、本書は世に得易からざる幾多の珍書を參考し、專門師匠の校閲を請ひ、優麗なる圖を加へ、順序よき區別の下に、反覆叮嚀に冠婚喪祭の禮法、起居、言語、衣服、應對、宴遊、獻酬の諸式より、上下、父子、夫妻、兄弟、親戚、知友等の諸作法まで、凡て和洋の禮式一切を記述す。其題書、挿畫及び製本の優美なる、亦世間に類似少し、紳士貴女を始め、都鄙總ての家庭に各一本を藏せられなば、資益必す多からん。

茶の湯と生花

從二位伯爵東久世通禧公題辭
從三位伯爵松浦詮公序文
從三位渡邊驥君題辭
上杉義順君夫人題詠
〔五版 出來〕

全壹冊　正價金貳拾錢　郵稅六錢

極彩色口繪　鈴木華村◎寫眞銅版畫：式部長官侯爵鍋島直大公：同夫人榮子君：挿花：煎茶：宇治茶摘：陸前松島：信州善光寺：不忍池の蓮花：茶の湯：箱根早雲寺茶室の圖

茶の湯、生花は日本特有の一技にして、國風の瀟洒、清麗、氣韻、沈正の態を見るに足り、苟くも中以上の士女は皆之を辨へざるを耻とす。茲に斯道の大家に請ふて、其技の初步より奥秘に至る迄を、最平易明瞭に述べ、文の足らざる所は圖繪を以て之を補ひ、本書を讀む人をして又師に就くの煩なからしむ。紳士淑女の方々、居常禮法を治め、餘暇此二技に及ばゝ、家庭人品の高きと更に幾段ならん。

實用料理法

（四版出來）

從二位子爵北小路隨光公題辭
鍋島侯爵夫人榮子君題詠
幕府料理師範石井治兵衛君題詠
幸田露伴君序文

全壹冊美裝　正價金貳拾錢　郵稅六錢

極彩色口繪：武内桂舟㊞寫眞銅版畫：廣島松料理屋：近江琵琶湖：相州江の島：東京御茶の水：相州酒匂海岸の釣魚：武州多摩川の鮎釣：下總市川の鴨猟：上野八百勝：主子海老屋：江戸紫

金錢の使用にも死活の二法あり、全く肉菜にても、鹽梅調理の巧拙によつては味ひに天地の相違あり、故に賢くして節儉なる一家の主婦は、最も料理法に注意し、廉價にして味ひ善き食物を調ふべし。此書は此等の人々のために、日本、支那、西洋三國に渉り、最も簡便にして又最も實用に適する百般の調理法、及び獻立等を詳記し、兼て古今の料理法にも及べり、戸々日常必需の書は、實に之れなるべし。

家政案内

（三版出來）

華族女學校長細川潤次郎君題辭
權掌侍稅所敦子君題詠
西正三位夫人升子君題詠

全壹冊美裝　正價金貳拾錢　郵稅六錢

極彩色口繪：水野年方㊞寫眞銅版畫：大隈伯爵夫人：谷子爵夫人：西正三位夫人：金閣寺：銀閣寺：東本願寺祖廟：西本願寺：雲飛閣：小石川後樂園：岡山後樂園：東京近在の田植：相州小田原報德二宮神社：大和郡山耕牛

國の品格は國民戸々の家政に由り、國民の品格も亦多くは家政に由て養成せらる、故に心ある人は家政を重んじ、其整理と榮譽とに注意す。本書は日用百科全書中第一重要の編にして、家政整理、一家圓樂の樂、父母子女の心得、婢僕使役の心得等何人と雖心得ざる可らざる箇條を擧げ、丁寧親切に之を說明す、讀者之に由て汚濁と紊亂なき一家を經營せば、唯だ國の品格を高くするのみならず、最も健全にして智德ある子女を得べし。

琴曲獨稽古

（再版出來）

從三位子爵長田護美公題辭
權掌侍小池道子君題詠
琴曲名家松本操貞君序文

全壹冊美裝　正價金貳拾錢　郵稅六錢

極彩色口繪：寺崎廣業㊞寫眞銅版畫：美人彈琴之姿：廣水盤琴聲：三曲アイヌ彈絃：舞樂胡蝶王：胡蝶の舞：芝能樂聲：淺妻船：京舞子：ゑごり

世界の風雅國たる日本第一の樂器は實に琴なり。神代の昔より傳はりて、昔く上下に愛玩せられ、風調高邁、音韻精妙、最も餘情に富み、和漢諸樂器の調、一として之を應用せられざるなし。此書は其獨習の秘法を平易親切に擧げ、譜を以て之を補ひ、初歩より奥の手まで、其順序に由て明解す、閨秀才女一本を繙き給ばゝ、琴曲の妙を得て、日夕の雅興特に濃かなるべし。

衣服と流行

從三位子爵福羽美靜公題辭
鍋島侯爵夫人榮子君題詠
竹屋子爵夫人雅子君序文

全壹冊美裝　正價金貳拾錢　郵稅六錢

極彩色口繪：富岡永洗㊞寫眞銅版畫：官女の風姿：加茂祭の風俗：日光祭禮東あそび：田舍風の紡績：東京の鳳樂風と娼風：美人洋裝：美人の彈琴：東京藝妓と雛妓：鴨河納涼中の京舞子と舞子：大坂中の島に於ける浪花藝者と雛妓：藝子の習舞

衣服は體を蔽ひ、寒を防ぐ實用の外、又美を添へ氣品を加ふ、故に社會の進歩に隨つて衣服彌よ美に、流行益々盛なり。本書は和洋兩服の製法、用法より模樣色合を始め、古來流行、嗜好の變遷及び今時の流行等を詳叙し、文の足らざる所は優麗精緻の畫を用ゐ、懇切丁寧に之を說明す、紳士貴女等若し本書を身邊裝飾の參考に資せば、風采彌よ優美高尚なるべし

裁縫と編物

全一冊洋裝　正價金貳拾錢　郵稅六錢

極彩色口繪：梶田半古◉寫眞銅版畫：美人の裁縫：京都西陣の刺繍：洛東双美：安藝の殿島：京都智恩院：全祇園社：上野櫟名山：山城宇治平等院：富士山：雛の菊

女子の尊き天職は、母として子女を育成し、妻として一家を齊整するを主とす、特に家族の衣服類は、一として女子の手に繫らざるなく、裁縫及び編物は、實に子女として、尊卑に論なく、最も必要の手藝たり、本書に於て懇切丁寧に其順序方法を解明し、一讀其術に精通すべからしむ、他の慰み物に精しくとも、裁縫に迂きは、婦人の恥なるを辨へ玉ふ方は、速かに此書を讀み玉ふべし。

從三位子爵前田利鬯君題辭
從四位子爵本多利貫君題詠
清谿女史吉田調子君序文

住居と園藝

全一冊洋裝　正價金貳拾錢　郵稅六錢

極彩色口繪：三島蕉窓◉寫眞銅版畫：宇治松花亭：岡山後樂園：彦根樂々園より琵琶湖を望む：銀閣寺の庭：小石川後樂園：池上本門寺本堂：上野の雪：智恩院の庭：大丸の庭

住居を占むる土地の撰定、家屋の構造、內外の裝飾より、住居の美を添へ、朝夕心目を樂ましむべき園藝の事を詳記し、優美風雅の書を挿みて、文の足らざる所を補ふ、人生文武の餘暇、園藝を手づからして清香を吸ひ、心神を青樹紅花の間に養はゞ、健康娛樂併せ得べし。

從四位子爵本多忠貫君題辭
從五位子爵諏訪忠元君序文
寶物取調委員小杉榲村君題詠

山田美妙君著

日本室內粧飾法

全壹冊　紙數百八十頁

美裝菊版
水版密圖
數十個入

品藻の優美天質の端麗は婦人の依て地歩を得る所以かの室內粧飾法の如きは大に日本婦人の注意を要すべく又其纖緻なる意匠に適せり然れども從來粧飾に關する著書あらず從て婦人の意を用ふると切ならず今美妙君得意の美觀的精神を以て大に室內の粧飾を述へらる試に其目次を擧ぐれば左の如し

目次

總論：配合の事◉配合の二要素＝色と形◉色の配合○好く合ふ色◎總論：花の生け方◉花の各流○天地人眞行草の枝くばり○本逆兩勝手○眞行草三種の姿◉葉、花及び色の陰陽○去り嫌ひ七ヶ條○花躰の高さ○花器の長の鑑定○花器の種類○花臺○花器と花臺の取合はせ○花と花器のとり合はせ◉季の物の類別◉花くばり○花のこしらへ方○燕子花と花菖蒲○牡丹○藤○朝顏

是皆大に注意を要すべきの件又挿畫數十個を以てせり綸爛の錦に眩し濃艶の色に傾くの婦人諸君一度本書を繙ば清淡雅美品物の位置着色の配合花卉の姿勢等皆瞭然として明なるべく秀麗純美の趣味と健康和樂の泉源融然として溢れん

正價　金拾五錢
郵稅　六錢

一月新刊書籍廣告

幸堂得知翁著
幸堂滑稽談 全一冊 正價金廿五錢 郵稅六錢

三遊亭圓朝子作
名人長二 全一冊 正價金二拾錢 郵稅四錢

三遊亭圓朝子述 椿說
蝦夷なまり 全一冊 正價金三拾錢 郵稅六錢

隈谷逸山人編
安達ケ原 全一冊 正價金五錢 郵稅二錢

奚澤振作君著
子供のしつけ 全一冊 正價金拾五錢 郵稅四錢

英國ロバート、マックンザー氏著
十九世紀史 全一冊 正價金四拾錢 郵稅八錢

太陽小說 第壹卷 正價金二拾五錢 郵稅六錢

松井柏軒君著
新撰日本帝國史 全一冊 正價金三拾五錢 郵稅八錢

柳井綱齋君著
希臘獨立戰史 全一冊 正價金拾八錢 郵稅六錢

幸堂得知翁校訂
忠臣藏淨瑠璃集 全一冊 正價金五拾錢 郵稅十六錢

博文館編輯局編
勤學と處世 全一冊 正價金二拾錢 郵稅六錢

農學士石井淳二郎君編
砂糖篇 全一冊 正價金拾五錢 郵稅六錢

農學士山下勝人君編
日用品製造篇 全一冊 正價金拾五錢 郵稅六錢

野崎左文君著
日本名勝地誌 北陸山陰 第七編 正價一冊卅錢 郵稅八錢

平田純一郎君著
相場必勝法 全一冊 正價金五拾錢 郵稅六錢

博文館發行の一月中新刊雜誌。全書類に悉く**特別割引券**を添へたり

帝國文庫新刊

校訂
水滸傳

全二冊 皮背金 正價一冊五錢 洋裝金 正價一冊六錢 郵稅十錢

下卷十二月二十五日發

小說として、東洋第一の傑作は、實に水滸傳なり。百八の豪傑、心胸面目、皆躍如として活動し、離合窮達の變、神奇鬼異、殆んど人間の作に非ず、馬琴の八犬傳も、之より醞釀せるも、及ばざること數十等なり。今之を校刻して世に公にす。請ふ愛讀を賜へ。

(製本既成)

幸堂得知翁校訂
忠臣藏淨瑠璃集

全一冊 洋裝上製 正價五拾錢 郵稅拾六錢

本書目次

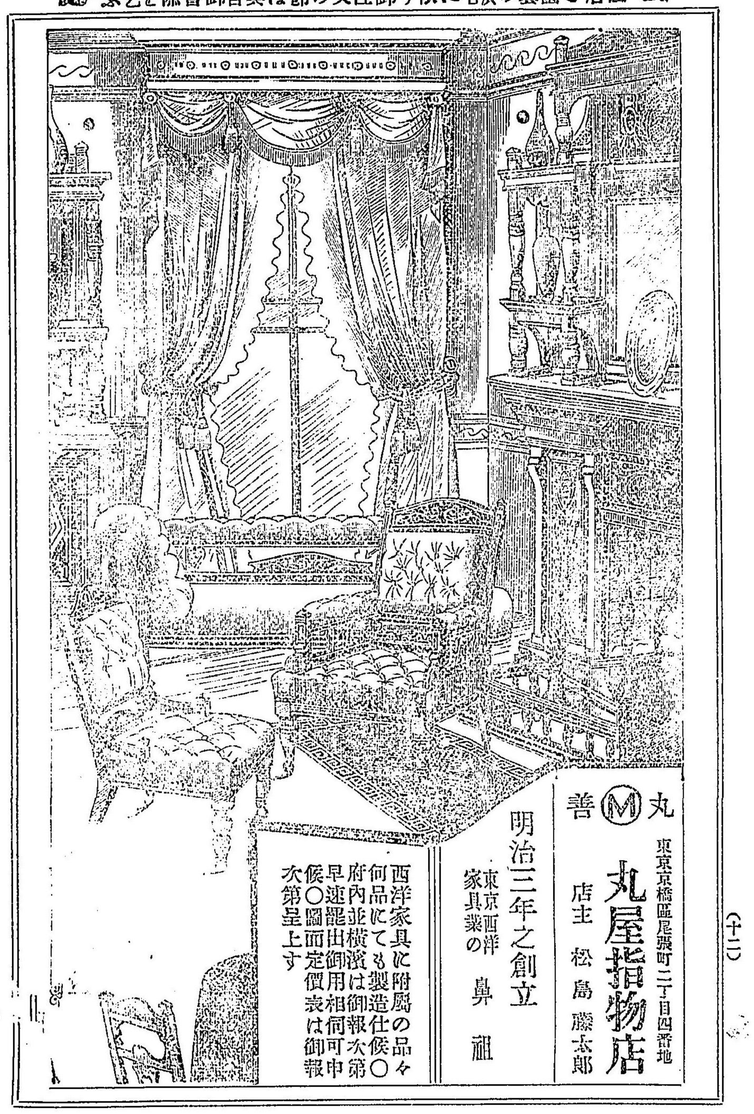
碁盤太平記　忠臣金短冊　假名手本忠臣藏
難波丸金鶏　いろは歌義臣鑑　太平記忠臣講釋
忠臣後日噺　嫉分武士鑑　いろは藏三組盃
忠臣いろは實記　廓景色雪茶湯　忠臣墳盟約大石

帝國近世の一大奚談、一大偉蹟たる赤穗義士の復讐を感激之を謠へる淨瑠璃を蒐め、茲に本書を成す、事の忠孝貞烈人を感奮せしむるのみならず、行文整調の妙、まゝいふ可らざるものあらん、幸ひに新春消閑の好讀本として御購讀あらんを

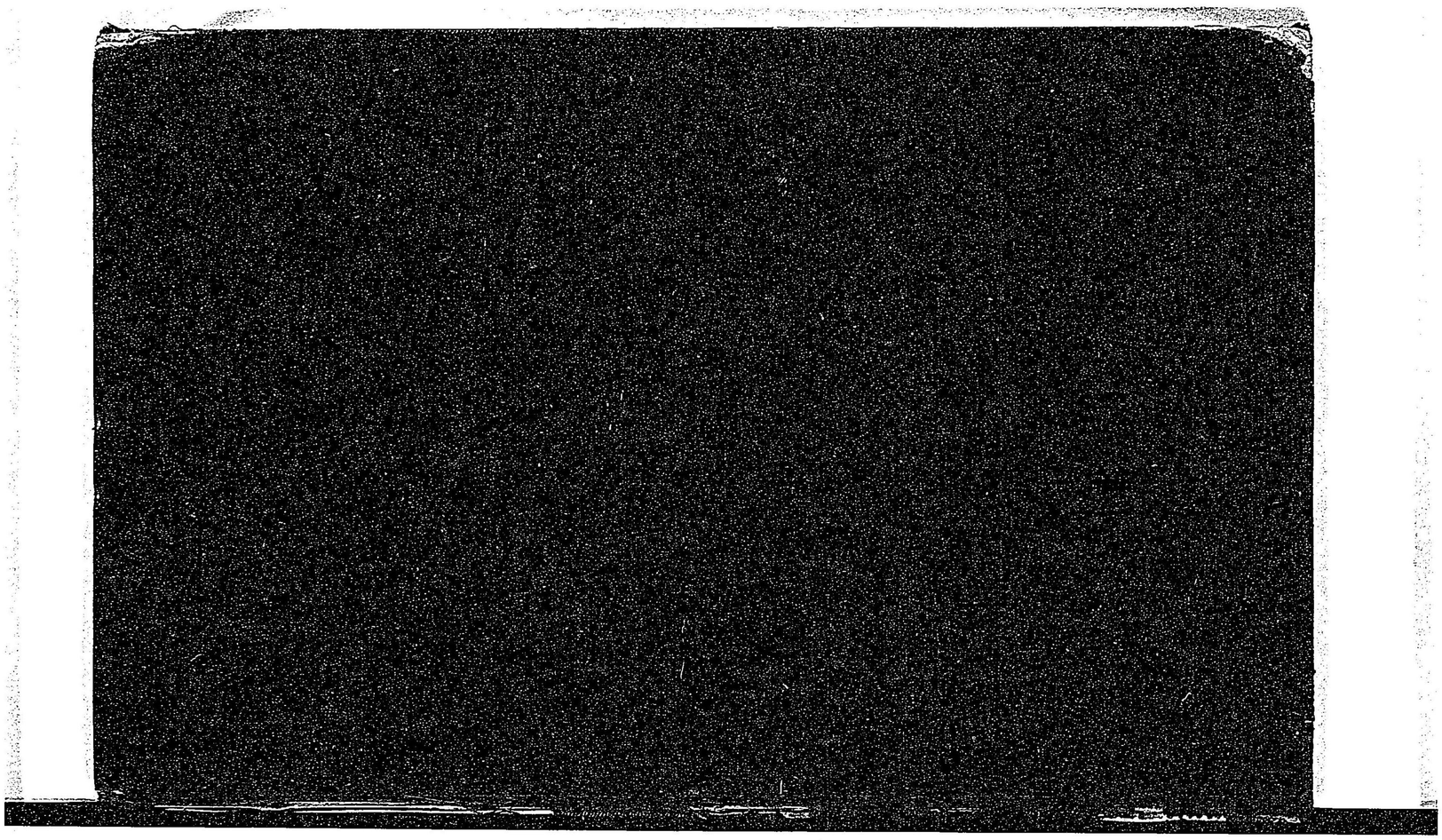
一月廿五日發兌

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

住居と園藝の廣告に依り御注文の節は其旨御書添を乞ふ



45
184



45
184

204255−000−0

45−184

住居と園芸

博文館

M29
EDQ−0052